

朝鮮語の音と文字

菅野裕臣
神田外語大学

1. どの言語も文法及び語彙からなり、文法を記述したものが文法書で、語彙を記述したものが辞典(辞書)である。文法書は文法ともいうことがある(ヨーロッパ語では概して両者の区別はない)。辞典の小さいものは語彙集ともいうが、辞典も語彙集も基本的に同じである。語彙とは単語の総体である。文法と語彙の総体である言語は形と意味を持っている。文法書も辞典も文法と語彙の形と意味が記述されたものである。言語学のうち文法と語彙に関する分科をそれぞれ文法論、語彙論と呼ぶ。

言語は、それが完全に研究されている場合には、文法書と辞典があれば、理解可能である。言語を理解するということは未知の言語を解読することと基本的に変わりはない。ただし完全な文法書と辞典を持つ言語はいまだにないと言ってよい。英語その他の大言語は非常によく研究されているが、まだ完全には程遠い。まして日本語、朝鮮語、中国語のような言語はそれ以上に研究が遅れている。それでも辞典だけを取り上げて日本語も朝鮮語も辞典にはかなりの語彙が収録されているが、アジアの多くの言語では辞典から漏れた語彙が非常に多いというのが実情である。言語学は本来完全な文法書と辞典の作成を目的とする学問である。

また文法と語彙の複雑な体系としての言語は人間しか持っていないといわれる。鳥や猿がこのような体系としての言語を持っているとは考えられていない。例えば「映画の文法」といわれることがあるが、「映画製作の規則」程度の意味しかない。

2. どの言語も文法と語彙は音(おん)という手段で表される。音(おん)以外によって表される言語というのが報告されたことはない。過去の言語で文字が解読されず、どういう音(おん)を持っていたかが不明の言語があるが、それはまだ解読されていないだけのことであって、その言語にも音(おん)はあったと考えるべきである。文字と音(おん)とは区別しなければならない。文字は、それを持っている言語集団も持っていない言語集団もあるように、文化の産物だが、言語の音(おん)は文化と関係なしにどの言語にも存在する。

言語音すなわち人間の声は普通の音(おと)と物理的には少しも異なるところがない。朝鮮語では「音(おと)」も「声」も等しく소리といわれる。従って言語音も音響学あるいは音響音声学で扱われ得る。

しかし言語音は普通の音(おと)とは異なり言語に固有な「意味」と結び

つく。

言語とはいえない無意味な音（おん）なら無限にあるかも知れないが、言語として意味のある音（おん）、すなわち言語音は、語彙や文法のように数多くの項目があるのとは異なり（特に語彙は一つの言語にいくつあるかがはっきりしないほど多い）、特に後述のように「意味の区別に役立つ」という観点を導入した場合には、限りがある。

言語音についての学問を音論という。普通は音声学ともいう。音論（音声学）は、必ず人間の調音器官を使って発音されるために一定の限度のある言語音を扱うため、文法論や語彙論とは異なり概してよく研究されているが、なおも問題を残している。

3. 言語音と文字とは厳密に区別しなければならない。文字は必ずしも言語音を表したものとはいえない。ギリシャ字、ラテン字（ローマ字）、キリル字（いわゆるロシア文字）、アラビア文字、モンゴル文字、インド系諸文字、朝鮮文字（ハングル）、日本のかな等は言語音を表したもののだが、漢字は概念あるいは形態素を表したものである。現在前者を表音文字、後者を表語文字ということが多いが、前者はさらに日本のかなのように音節を表すものを音節文字、ギリシャ字、ラテン字のように原則として文字とそれが表す音（おん）が一对で対応するものを単音文字という。ハングルはラテン字と同じく単音文字であるが、かなのように音節にまとめて初めて文字として機能するという意味では音節文字でもあり、極めて特殊である。

人類の歴史で初めてメソポタミアの地にシュメール文字が出現したが、これはエジプトのいわゆる象形文字、ずっと後に現れた中国の漢字と同じく表語文字だった。シュメール文字はシュメール語、アッカド語、アッシリア語その他で音節文字としても用いられ、あたかも漢字から出来た朝鮮の口訣（こうけつ）とか吏讀（りど）とか呼ばれるものや日本のかな（万葉仮名、カタカナ、ひらがな）のような音節文字と似た機能を持っていた。他方エジプト文字は子音だけを表す単音文字としても用いられ、これが後にギリシャ人に至ってある種の子音字を母音字としても用いるにいたり、完全な単音文字が成立した。ハングルは直接には他の文字とは関係がないが、完全な単音文字である。文字に関する分科を文字論という。

ここでいう音節、単音とは音論（音声学）の概念である。形態素とか単語（語）は文法論のうち形態論の分野に属する。

ついでながら文字と記号（符号）について述べる。音声記号（音標文字）、点字、速記、モールス符号、手旗などは、文字とは違って大抵は製作者が分かっているほど新しいもので、使用者が限られているが、それらは読むことが出来、文字化し得るから、文字の代替物だといえる。いわばそれらがほぼ単音文字の代替物であるのに対し、手話は表語文字の代替物だといえる。数字（いわゆるアラビア数字など）や句読点のようなものははっきりと言語記

号を表しているから、文字に属する。

これに対して例えばアメリカ・インディアン絵文字のように明確な文法を以ってだれでもが同じように読むことが出来ずに大雑把な意味を伝えるだけのものは文字とはいえない。

また数学の記号、例えば+や-のようにプラスとかマイナスとか読めるものもあるが、それだけでなくそれ自体がなんらかの概念をあらわしてはいるが、言語記号を表すとは認められないものは記号と普通いつている。

記号とは記号論では一般に他の概念を表現し得る物質的な形(この意味では記号すなわち代替物である)をいい、例えば交通信号も、肯定、否定の意思表示の方法も一種の記号である。言語も記号の一種だが(言語記号)、これはいろいろの記号の中でもっとも高度に発達した体系をなす。文字とか言語音とかはすべて言語記号に属するものである。

4. 例えば日本語「ちょうせんご、朝鮮語」を日本人は普通「チャーセンゴ」[tʃo:sɛŋgo] (一層ゆっくりした発音ならば「チョオセンゴ」と発音し、朝鮮語“한국말”を朝鮮人は普通[haŋɡunmal] [hangumal]と発音する。なお「チャーセンゴ」は[tʃo:sɛŋgo]のように「ゴ」の部分をつまみ鼻にかかった音(おん)で発音する人がおり、これが日本放送協会のアナウンサーに発音される標準的なものとされるが、とりあえず[go]としておく。ここでまず日本語では「ちょうせんご」、「朝鮮語」/[tʃo:sɛŋgo]、「チャーセンゴ」、「チョオセンゴ」、朝鮮語では 한국말 / [haŋɡunmal], [hangumal]という表記が“/”の左右で違っていることに注意されたい。“/”の左側は文字を表し(日本語ではひらがなと漢字)、右は音(おん)を表している(日本語では発音記号とかたかな、朝鮮語では発音記号とハングル)。ここでかたかなとハングルは発音記号の代替物として用いられていることに注意されたい。かなもハングルも表音文字であるから、一定の限度までは発音記号の代替物たり得るのである。なお厳密に言えば左側に用いられたかなもハングルも「正書法」による表記なのであって、発音記号とは同じではない。このことには後で触れる。

さて上記の単語(これは形態論の概念である)は日本語では普通[tʃo:sɛŋgo]、「チャー-セン-ゴ」(あるいはもっとゆっくり発音すれば[tʃo-o-sɛŋgo]、「チョ-オ-セ-ン-ゴ」)、朝鮮語では [haŋɡunmal], [hangumal] のように“-”を境に音(おん)の連続を区切る。このように音(おん)の連続を最低限一息に発音できる単位に区切ったものを「音節」という。日本のかなは典型的な音節文字だが、ハングルもまた音節文字的性格を持っていることが分かる。

なお日本語では長母音を2つの短母音の連続に([tʃo:]>[tʃo-o]「チャー」>「チョ-オ」)、撥音(はねる音(おん))を単独に発音することが可能である([sɛŋ]>[sɛ-ŋ]「セン」>「セ-ン」)。このように細分化された区切り

を言語学的には「モーラ」と呼ぶ。世界の言語には音節を数える言語（Silbenzählende Sprache）とモーラを数える言語（Morenzählende Sprache）とがあり（Trubetzkoy による）、朝鮮語は前者、日本語は後者に属する。日本のかなは本来は音節文字だったが、現在のかなはモーラ文字と読んだ方がよい。

この音節とかモーラをさらに細分化して単音が得られる。単音とはそれ以上分割出来ない音（おん）の単位である。

例：日本語

文字表記（漢字かな混淆）：「朝鮮語は絶対的に難しい言語である。」

文字表記（ひらかな）：「ちょうせんごは ぜったいてきに むずかしい げんごで ある。」

発音記号（IPA）：[t͡ɕoːsen̩go-wa ɕet̚tai-te-ki-ni mu-zw-ka-fiː \ gen \ -go-de a-ru] （“-”は音節の境界；下線部は低，無符号は高，\は高低音（おん）の高低は東京の発音による）。

発音記号（IPA）：[t͡ɕo-o-seŋ-go-wa ɕe-t̚ta-i-te-ki-ni mu-zw-ka-fi-i ge-n̩-go-de a-ru] （“-”はモーラの境界；下線部は低，無符号は高）。

日本語では上記の例から次の単音が取り出される。母音：oː, e, o, ai, i, u, iː, a. 子音：t͡ɕ, s, ŋ, g, w, ɕ, t, k, n, m, z, ʃ, d, r.

朝鮮語

文字表記：“한국말은 절대적으로 어려운 언어이다.”

発音記号（IPA）：[han̩ɡun̩ma-ruw̃ t͡ɕol̩ʔt̚ɕo-gu-ro ɔ-rjo-u-n ɔ-no-i-da] （“-”は音節の境界）。

ハングル発音表記：[hangma-ruŋ t͡ɕol̩ʔt̚ɕo-gu-ro ɔ-rjo-u-n ɔ-no-i-da]。

朝鮮語では上記の例から次の単音が取り出される。母音：a, u, ʉ, ɔ, ɛ, o, i. 子音：h, g, ŋ, m, r, n, t͡ɕ, l, ʔt̚ɕ, ɕ, d.

母音とは声をどこまでも長く伸ばせる音（おん）であると一応いえる。日本語：[a]（ア）[i]（イ），[u]（ウ），[e]（エ），[o]（オ）。日本語には他に長母音（[aː]（アー），[iː]（イー），[uː]（ウー），[eː]（エー），[oː]（オー）），二重母音（[ai]（アイ），[au]（アウ），[ui]（ウイ），[oi]（オイ））がある。朝鮮語：[a]（ㅏ），[ɔ]（ㅓ），[o]（ㅗ），[u]（ㅜ），[ʉ]（ㅡ），[i]（ㅣ），[ɛ]（ㅓ），[e]（ㅕ）。現代朝鮮語のほとんどの方言には長母音も二重母音も存在しない。ただしソウルでは60歳以上の人では長母音が認められる。ここで音（おん）はあくまでも文字とは異なるのだから，母音字1字だけでなく母音字2字が1つの母音に対応することもあることに留意されたい。ㅓ, ㅕは文字が出来た時には恐らく[ai], [oi]のように二重母音で発音されたものと思われる。音（おん）が変わったのに表記が保守的な例である。日本語の表記「えい」，「おう」も現在では長母音「エー」，「オー」となっている。例：「ちょうせん」（朝鮮）—「チョーセン」，「せんせい」（先生）—「セン

セー」。

母音とは声をどこまでも長く伸ばせる音(おん)であるといったが、実はこれも曖昧な規定であり、二重母音の場合はこの規定は当てはまらない。母音以外を子音というのだが、声をどこまでも長く伸ばせないのが子音だというわけにはいかない。連続体としての言語音を母音とか子音とかはっきりと区分し得ないのが実情である。例えば鼻音(声を鼻に抜かす音(おん)) [m] (ㄹ), [n] (ㄴ), [ŋ] (ㅇ)などはどこまでも長く伸ばせるし、摩擦音(発音器官が閉じずに摩擦させて息、声を出す音(おん)) [s] (ㅅ), [h] (ㅎ)なども同じである。絶対的に声を長く伸ばせないのが閉鎖音(あるいは破裂音)(発音器官を閉鎖させてから息、声を漏らす音(おん)) [p], [b] (ㅍ); [t], [d] (ㄷ); [k], [g] (ㄱ)などであり、破擦音[s], [ʃ]; [ʒ], [ʒ] (ㅈ)などは長く伸ばすと摩擦音が残る([s], [z]; [ʃ], [ʒ] (ㅊ))。声や息を伸ばせるかどうかの観点で伸ばせる方から伸ばせない順に並べると、母音—半母音—鼻音—流音—摩擦音—破擦音—閉鎖音(あるいは破裂音)のようになる。半母音とは [w] (ㅍ; ㅌ, ㄱ, ㅊ, ㅌの頭音), [j] (야, 유, 요; ㅈ, ㅊ, ㅊ, ㅊ, ㅊの頭音) のことである。半母音とはいわば母音が音節の中で主音(それ自体で音節を成し得る)ではなく副音(主音に添えられてそれ自体としては音節を成さない)として用いられたものをいい、従ってㅍ; ㅌ, ㄱ, ㅊ, ㅌ; 야, 유, 요; ㅈ, ㅊ, ㅊ, ㅊ, ㅊは「副音+主音」(上昇的二重母音)であり、また先に述べた二重母音とは実は「主音+副音」(下降的二重母音)のことである。流音は [l] (ㄹ) などである。ただし[r] (ㄹ) (日本語, 朝鮮語)は弾音(はじき音)といい、閉鎖音に近い。なおこのことは言語によっても微妙に異なる。音声学では声というのは声帯を震わせて作る音(おん)のことであり、息というのは声帯振動を伴わずに肺から上がってくる気流のことである。そして有声音とは声を伴う音(おん) ([b], [d], [g] など)であり、無声音とは声を伴わない音(おん) ([p], [t], [k] など)である。

ところで音節構造を考慮すると、子音と母音とはかなり明白になる。

朝鮮語の音節は次のような音(おん)の連続からなる。略号: V—母音([i], [e], [ɛ], [a], [ɔ], [o], [u], [w]), S—半母音([w], [j]), C—子音(音節の頭), C'—子音(音節末) ([p], [t], [k]; [m], [n], [ŋ]; [l])。

- | | | | | |
|-----|-----|------|------|--------|
| (1) | V | SV | CV | CSV |
| (2) | VC' | SVC' | CVC' | CSV C' |

(1)のうちSが[j]のものだけが「半切表」をなす。(1)V, (2)VC'は半切表で子音字“ㅇ”が音節の頭に付けられるが、この子音字は対応する音(おん)を持たない。ここでも文字と音(おん)の違いが現れる。

日本語の音節は次のような音(おん)の連続からなる。略号: V—短母音([i], [e], [a], [o], [u]), V:—長母音([i:], [e:], [a:], [o:], [u:]), Vi—二重母

音 ([ai], [au], [ui], [oi]), S—半母音 ([j]), C—子音 (音節の頭), C'—子音 (音節末) (「ン」(撥音はつおん), 「ッ」(促音そくおん)).

- (1) V V: Vi SV SV: SVi
 CV CV: CVi CSV CSV: CSVi
 (2) VC' V:C' ViC' SVC' SV:C' SViC'
 CVC' CV:C' CViC' CSVC' CSV:C' CSViC'

ところで日本人はゆっくりした発音では C'をあたかも 1 音節のように発音し, さらに長母音 V:を V-V のように, 二重母音 Vi を V-i のように 2 音節のように発音する. そうすると日本語の音節はゆっくりした発音では次のようになる.

V SV CV CSV C'

たまに次のようなものが現れる. 「ロンドンっ子」[ro-n·do-n·k·ko], 「仙台っ子」[se-n·da-i·k·ko] (下線は音節を示す).

C'のうち「ン」(撥音)を含めていわゆる五十音図をなす. この五十音図が日本の詩歌を作る時の韻律の単位となる. この単位をモーラと呼ぶ. 日本語のモーラの構造はとても簡単だが, 1 モーラ, 2 モーラ (末尾に C'), 3 モーラ (末尾に VC', iC') は 1 音節を作り得る.

5. モーラは韻律とアクセントの観点から重要な単位である.

日本語で先に挙げた (4.) 文でアクセントはモーラの観点からは次のようになる. 「: このモーラから高くなる ; 1: このモーラまで高くて次のモーラから低くなる」.

文字表記 (漢字かな混淆): 「朝鮮語は絶対的に難しい言語である。」

発音記号 (IPA): [ʃo-ʽo-se-ŋ-go-wa ɬe-ʽt-ta-i-te-ki-ni mu-ʽzw-ka-ʃil-i geʽŋ-go-de aʽru] (“-”はモーラの境界).

アクセントとは単語のある音節やモーラを強めたり, 高めたりして単語を特徴付けるものである. 英語は音節を強める強弱アクセント (stress accent) があるが (ただし英語ではアクセントのある音節は強いだけでなく高く, ロシア語ではアクセントのある音節は強いだけでなく, そこの母音は長い), 日本語にはモーラを高める高低アクセント (pitch accent) がある. 例: 英語 concrete [ˈkɒn-kri:t] <具体的な> / [kən-ˈkri:t] <具体化する>. 日本語 [aʽme] <雨> / [a ʽme] <飴>.

アラビア語, サンスクリット, 古典ギリシャ語, ラテン語などはアクセントと韻律においてモーラ言語である. また中期朝鮮語及び現代朝鮮語慶尚道方言, 咸鏡道方言にはアクセントがあり, それらはやはりモーラ言語といえ

る（もっともそうでないという説もある）。

日本語では韻律はモーラで数えられる。__は1音節をなす。

例：日本語（石川啄木、『一握の砂』から）

ちっとして

(5) [çi-「t-to ji-「te /

黒はた赤のインク吸ひ (7+5) kuɽ-ro haɽ-ta aɽ-ka-no/i-「n-kw sw-「i /
堅くかはける海綿を見る (7+7) ka-「ta-kw ka-「wa-kel-rw / ka-「i-me-n-o
mil-rw].

古典ギリシャ語の韻律はモーラで数えられる。__は長い音節（=短い音節＋短い音節），__は短い音節。短い音節は1モーラと数えられ，長い音節は短い音節2つ分，すなわち2モーラと数えられる（__=__+__）。長い音節は長母音，二重母音，母音＋子音で終わる音節，短い音節は短母音で終わる音節である。この点も日本語とよく似ている。

例：古典ギリシャ語（ホメロス、『オデュッセイア』から）

長短短 長短短 長短短 長短短 長短短 長短

Án-dra mo-i én-ne-pe, Moû-sa, po-lúth-ro-po-n, hòs má-la pol-lá
plág-chthē, e-peì Troí-ēs hi-e-ròn pto-lí-et-ro-n é-per-se;
pol-lôn d'an-thrô-pō-n í-de-n ás-te-a kai nó-o-n ég-nō,
pol-là d'hó g'en pón-tōi pá-the-n ál-te-a hòn ka-tà thū-món,
ar-nú-me-nos én te p-sū-chén kai nós-to-n e-tai-rōn.

強弱アクセントを持つ言語もアクセントに基づく韻律がある。

例：ロシア語（「バイカル湖のほとり」«Бродяга» から） ´：強い音節の母音。__：1音節。

弱強弱 弱強弱 弱強弱

弱強弱 弱強弱 弱強

Po dí·kim ste·pjám Za·baj·ká·l'ja, По диким степям Забайкалья,
gde zó·lo·to ró·jut v go·ráx, где золото роют в горах,
bro·djá·ga, su·d' bú pro·kli·ná·ja, бродяга, судьбу проклиная,
ta·shchíl·sja s su·mój na ple·cháx. тащился с сумой на плечах.

言語によっては，日本語や英語の場合とは異なり，アクセントがいつも単語の中で一定の位置にあり，意味の違いを引き起こすことにならないようなものがある。日本語や英語のような場合は自由アクセント，そうでない場合は固定アクセントということがある。固定アクセントは次のものがある。

- (1) 語頭にいつもアクセントのある言語：チェコ語，ハンガリー語，フィンランド語等。
- (2) 語末にいつもアクセントのある言語：フランス語等。
- (3) 語末から 2 番目の音節にいつもアクセントのある言語：ポーランド語，エスペラント等。
- (4) 語末から 3 番目のモーラにいつもアクセントのある言語：古典アラビア語，ラテン語。
- (5) 語末から 4 番目のモーラにいつもアクセントのある言語：サンスクリット。

現代朝鮮語（慶尚道方言，咸鏡道方言等を除く）は概して語頭がいつも強いから（1）に属するかも知れない。モンゴル語も（1）に属すると思われる。

語末から 3 番目の音節—語末の範囲内でのみ自由アクセントを持つという言語がある（イタリア語，スペイン語，ポルトガル語，ギリシャ語等）。ドイツ語は語幹の頭にアクセントを持つ言語である。

中国語は日本語のように高低があるからモーラ言語のように見えるが，例えば北京語では各々の音節が 5 つの声調（高，低高，低，高低，軽）のうちのどれかを必ず持つ。日本語のように単語ごとにあるモーラに高低の指標のある言語（アクセントのある言語）とは異なり，音節ごとに高低が決まっている北京語のような言語を声調言語と呼ぶ。ここには中国語のほかにヴェトナム語，タイ語，ビルマ語などが属する。

例：中国語（北京語，普通話）（ $\bar{\quad}$ ：高調（第 1 声）， \nearrow ：上昇（低高）調（第 2 声）， \vee ：低調（第 3 声）， \searrow ：下降（高低）調（第 4 声）， \cdot ：軽声）。

“三民主義是孫文的思想。” Sānmínzhūyì shì Sūn Wén dì sīxiǎng. <三民主義は孫文の思想である。>.

6. 日本語の子音のうち (4.) ザ行の子音は語頭では概して破擦音 [dʌ]，語中では摩擦音 [z]，ただし「ン」の後ろで [dʌ] で現れる。例：「ぜったいてきに（絶対的に）」[dʌttaitekini]，「むずかしい（難しい）」[mʌzʌkafi:]，「あんず（杏）」[anʌdʌ]。このように同じ音（おん）だと思って発音している音（おん）はその音（おん）の前後の環境によってさまざまに変わり得るし ([dʌ]・[z])，こういう音（おん）の間の違いに話し手は気づいていないのが普通である。このような異なる音（おん）([dʌ]・[z]) を同一音の異音あるいは変種（ヴァリエント）と呼ぶ。すなわち [dʌ] も [z] 実質的にも同じ音（おん）と扱ってよい。異音はアメリカ言語学の術語だが（すなわち [dʌ] も [z] もそれぞれ同一音の異音），かつてヨーロッパでは [z] は [dʌ] の変種（ヴァリエント）と呼ばれた（その際どっちを変種（ヴァリエント）とするかが問題となり得る）。

撥音「ン」はいろいろな音（おん）で現れる。「げんご（言語）」[gengol]，

「けんか (喧嘩)」[kenka]; 「あんま (按摩)」[amma], 「あんばい (按配)」[ambai], 「さんぱい (参拝)」[sampa]; 「あんない (案内)」[annai]; 「あんた (貴方)」[anta]; 「かんだ (神田)」[kanda], 「カンツォーネ」[kantsō:ne]; 「あんず (杏)」[andŭ]. このように「ン」は両唇音 [m], [b], [p] の前では両唇鼻音 [m], 歯音 [n], [t], [d], [ʈ], [ɕ] の前では歯鼻音 [n], 軟口蓋音 [k], [g] の前では軟口蓋鼻音 [ŋ] が現れる。「ン」はこの他にも実にいろいろな音 (おん) として現れる。「きん (金)」[kin] (口蓋垂鼻音) (語末); 「だんあん (断案)」, 「あんい (安易)」, 「あんうん (暗雲)」, 「はんえい (繁栄)」, 「だんおん (弾音)」のような母音の前の「ン」は皆鼻母音 (鼻にかかった母音) となる。[m], [n], [ŋ], [ɳ], 鼻母音は「ン」の異音である。このように音 (おん) は置かれた環境の影響を受けていろいろに変わり得る。

促音「ッ」は概して後続の子音を長子音あるいは重子音にした形で現れる。「いっぱい (一杯)」[ippai], 「ぜったい (絶対)」[ɕettai], 「はっか (薄荷)」[hakka], 「せっつ (摂津)」[settsu]. 外来語では次のようなもので現れた。

「バッハ」[baxxa], 「バッグ」[baggw] 等。

「シ」[ʃi] という音節では子音 [ʃ] は, 「サ」[sa], 「ス」[su], 「セ」[se], 「ソ」[so] という音節の子音 [s] とは異なり, 舌の位置が母音 [i] に引かれて前寄りとなっている。同じように「ザ」[ɕa / za], 「ジ」[ɕi / ʒi], 「ズ」[ɕu / zu], 「ゼ」[ɕe / ze], 「ゾ」[ɕo / zo] も参照せよ。この場合 [s] / [ʃ], [ɕ / z] / [ɕ / ʒ] は日本語ではサ行の子音, ザ行の子音の異音であるといえる。英語では see [si:] <見る>, she [ʃi:] <彼女> は意味の違いを起こすので子音 [s], [ʃ] は異なる音 (おん) と認められるが, 日本語では [s] も [ʃ] も同一音の異音になるのである。

朝鮮語でも, 日本語に似て, 사 [sa], 서 [so], 소 [so], 수 [su], 스 [su], 새 [sɛ], 세 [se]; 시 [ʃi] において [s] / [ʃ] は同じ子音の異音である。

朝鮮語ではㅍ, ㅌ, ㅍ, ㅌという子音は語頭で無声音, 語中で有声音に挟まれると (母音あるいは有声音 [m], [n], [ŋ], [l] の後ろで) 有声音になる。ㅍ [p] / [b], ㅌ [t] / [d], ㅍ [ɸ] / [ɕ], ㅌ [k] / [g]. たとえば単語집 [ɸip] <家> /이 집 [iɸip] <この家>, 고기 [kogi] <肉> /소고기 [sogogi] <牛肉> を参照。日本語では [p] / [b], [t] / [d], [ʈ] / [ɕ], [k] / [g] 等は次のように意味の違いを引き起こすが, 朝鮮語はそういうことはない。[pasu] <パス> / [basu] <バス>, [toku] <得> / [doku] <毒>, [sureru] <連れる> / [ɕureru] <ずれる>, [kin] <金> / [gin] <銀>. つまり日本語では無声子音と有声音子音とは意味の識別に役立っているが, 朝鮮語ではそういうことにならないのである。このように意味の識別に役立つ音 (おん) と意味の識別に役立たない音 (おん) とがあり, 前者を音素 (phoneme) (これがかつて音韻といったこともある), 後者を音声 (sound) あるいは音 (おん) (phone) と呼ぶ (sound はヨーロッパの術語, phone はアメリカの術語である)。言い換えれば無声子音と有声子音の違いは日本語では音素の違いだが (すなわち意味の識別に

役立つ), 朝鮮語では同じ音素の異音の違いでしかない(意味の識別に役立たない)のである。

このことは言語学で極めて重要なことで、今後慣例に従い音声を [] の中に、音素を / / の中に入れて示すことにする。日本語: /pasu/ [pasu] <パス>—/basu/ [basu] <バス>, /toku/ [toku] <得>—/doku/ [doku] <毒>, /cureru/ [ɕureru] <連れる>—/zureru/ [ɖureru] <ずれる>, /kin/ [kin] <金>—/gin/ [gin] <銀>; 朝鮮語: 집 /jib/ [ʃip] <家>—이 집 /i jib/ [iʃip] <この家>, 고기 /gogi/ [kogi] <肉>—소고기 /sogogi/ [sogogi] <牛肉>, 밥 /bab/ [pap] <ご飯>—아침밥 /acimbab/ [aʃʰimbap] <朝飯>, 달 /dar/ [tal] <月>—매달 /mɛdar/ [mɛdal] <毎月>。

日本語の撥音「ン」は /n/—[m], [n], [ŋ], [ɳ], 他さまざまな鼻母音; 促音「ッ」は /q/—[p], [t], [k], [s], [x], [b], [d], [g] という関係にある。

朝鮮語は 달 [tal] <月>, 탈 [tʰal] <仮面>, 딸 [ʔtal] <娘> のように次のような音素の対立がある。ㅁ /b/ [p] / [b], ㅂ /p/ [pʰ], ㅃ /b/ [ʔp]; ㄷ /d/ [t] / [d], ㅌ /t/ [tʰ], ㄸ /δ/ [ʔt]; ㅈ /j/ [ʃ] / [ʈ], ㅊ /c/ [ʃʰ], ㅉ /ʒ/ [ʔʃ]; ㄱ /g/ [k] / [g], ㅋ /k/ [kʰ], ㆁ /ɣ/ [ʔk]; ㄴ /s/ [s] / [ʃ], ㄷ /g/ [ʔs] / [ʔʃ]. つまりこれらは無気音 / 有気音 / 喉頭化音の対立である(無気音のうち ㄴ /s/ [s] / [ʃ], ㄷ /g/ [ʔs] / [ʔʃ] 以外は無声音と有声音の異音を持つが、有気音と喉頭化音は常に無声音である)。日本語にはこのような対立がない。日本語話者が無声音と有声音の別には強いが無気音と有気音の別に弱い所以である。逆に日本人の弱いところは朝鮮人が強いのである。これらを伝統的な朝鮮の用語(術語)では各々平音(無気音), 激音(有気音), 濃音(喉頭化音)と呼ぶ。この用語は便利だから多くよく用いられる。用語(術語)とは学問的に定義された概念であるが、便利ならば伝統的な用語を積極的に用いてよい。

朝鮮語では平音(無気音)と鼻音(有声音) /m/ [m], /n/ [n] は音節の頭だけでなく音節末でも用いられる。밥 /bab/ [pap] <ご飯>, 밥은 /babun/ [pa-bun] <ご飯は>; 발 /bad/ [pat] <畑>; 책 /cɛg/ [ʃʰɛk] <本>, 책은 /cɛgun/ [ʃʰɛ-gun] <本は>, 몸 /mom/ [mom] <体>, 몸은 /momun/ [mo-mun] <体は>; 논 /non/ [non] <田>, 논은 /nonun/ [no-nun] <田>。平音(無気音)ㅁ /b/, ㄱ /g/ は、初声(音節の頭)では [b], [g], 終声(音節末)では [p], [k] のように、無声音と有声音が異音である。さらに終声(音節末)における平音(無気音)の [p], [k] は濃音 /g/ の前以外では出わたりのない音(おん)で、日本人には甚だしく聞きづらく、促音のように聞こえてしまう。これを実用的には [p], [k] と表記してもよい。平音(終声) /d/ は普通 [t] (あるいは [ɖ]) であるが、平音 /d/ + 濃音 /g/ は [sʰs] となり、/d/ は [s] で現れる。例: 잡다 /jabɖa/ [ʃaʔta] <つかむ>—잡습니다 /jabɕumnida/ [ʃaʔsumnida] <つかみます>; 먹다 /mɔgɖa/ [mɔkʰta] <食べる>—먹습니다 /mɔgɕumnida/ [mɔkʰsumnida] <食べます>; 받다 /badɖa/ [paʔta] <受け取る> 받습니다 /badɕumnida/ [paʔsumnida] <受け取ります>

>. 似たような音声位置によって異なる音素に該当する例である。鼻音 ㅇ /ŋ/ [ŋ] だけは常に終声で用いられる。강 /kaŋ/ [kaŋ] <川>, 강은 /kaŋwŋ/ [kaŋ-wŋ] <川>. 激音, 濃音, ㅎ /h/ [h] は初声でのみ用いられる。ただし ㅎ /h/ [h] は語中では漢字形態素の頭音及び合成語の第 2 形態素の頭音でのみ用いられる。また次の例を参照。말 /mar/ [mal] <馬>, 말은 /marwŋ/ [ma-rwŋ] <馬は>. ここで初声 [r], 終声 [l] は朝鮮語では音素 /r/ の異音である。英語では /r/ と /l/ は異なる音素である。rice /rais/ [rais] <米>—lice /lais/ [lais] <しらみ>. 日本語では語頭の /r/ を一種の破擦音 ([d] と [l] をあわせたような音 (おん)) で発音し, 語中では弾音 [r] で発音する人が多いが, 常に [l] を発音する人もいる。

ここで朝鮮語の音素としての平音 (/s/, /g/ 以外は無声音, 有声音の異音を持つ), 流音 ([r], [l]) が 1 つの音素に 1 つの文字が対応していることはハングルが基本的に音素文字であることを示している。例えば “한국말은 절대적으로 어려운 언어이다.” という文 (/hangunmarun jorδɛjɔgworooryoun oncidɑ/) を [항공마른 절대저그로 어려운 어너이다] のようにハングル表記することが可能なのは, ハングルが音素文字であるためである。朝鮮語の辞書での発音表記がハングルによるのもこのことによる。ついであるがハングルをラテン字その他に移し変えることを「転写」というが, これについては菅野裕臣, 「朝鮮語の転写について」, 『韓国言語文化研究』, 第 10 号, 2005, 26-43 ページ参照。

音素は隣り合う音素と影響を与え合って具体的な音声となる。例えば日本語で「カ」/ka/, 「キ」/ki/, 「ク」/ku/, 「ケ」/ke/, 「コ」/ko/; 「キャ」/kya/, 「キュ」/kyu/, 「キョ」/kyo/ では「キ」/ki/ [ki], 「キャ」/kya/ [kia], 「キュ」/kyu/ [kiw], 「キョ」/kyo/ [kio] の子音は /i/, /y/ の影響を受けて [kɨ] という口蓋化子音となっている。そしてサ行に関しては「サ」/sa/ [sa], 「シ」/si/ [ʃi], 「ス」/su/ [su], 「セ」/se/ [se], 「ソ」/so/ [so]; 「シャ」/sya/ [ʃa], 「シュ」/syu/ [ʃu], 「ショ」/syo/ [ʃo] のようになる。英語とは異なって音声 [ʃ] は音素連続 /sy/ となるのである。この点は朝鮮語も同じである。샤 /sya/ [ʃa], 셔 /syɔ/ [ʃɔ], 쇼 /syo/ [ʃo], 슈 /syu/ [ʃu], 새 /syɛ/ [ʃɛ], 세 /syɛ/ [ʃɛ]. 日本語のハ行の子音はさまざまな異音を持つ。「ハ」/ha/ [ha], 「ヒ」/hi/ [çi], 「フ」/hu/ [Φw], 「ヘ」/he/ [he], 「ホ」/ho/ [ho], 「ヒャ」/hya/ [ça], 「ヒュ」/hyu/ [çw], 「ヒョ」/hyo/ [ço]. なお朝鮮語では /h/ は語中 (有声音に挟まれて) で [h] が有声化することが多い ([ɦ]).

ほとんど同じ音声が言語によっては異なる音素と認められることがある。日本語の音素 /n/ には 単独でモーラを成す [m], [ŋ], [n], [ɳ] 等の音声が属するが, 他方音節の頭の [m], [n], [ŋ] (後続の母音とともにモーラを成す) は音素 /m/, /n/, /ŋ/ あるいは /g/ をなす (日本語では音節末に現われるのは /n/ だけであり, /m/, /n/, /ŋ/ は決して現われない)。「神田」/kanda/ の /n/ も「仮名」/kana/ の /n/ も, 意識的にモーラに区切って発音しない限り,

事実上ほとんど同じ [n] で発音されている。朝鮮語や英語では [m], [n], [ŋ] は常に音素 /m/, /n/, /ŋ/ である。日本人が音節末の子音の識別に極めて鈍感な所以である。他方韓国人や欧米人言語学者はモーラが理解出来ないために日本語の音素 /n/ の存在を認めようとしない。例えば日本語「ミャ」、朝鮮語 {ㅁ야}, ロシア語 {мя} という音節の音声はほとんど同じだが ([mj̥a], すなわち口蓋化子音+母音), ロシア語ではその音素は /mj̥a/ と認められるのに対し、日本語も朝鮮語も /mya/ あるいは /mia/ としか認められないのは、ロシア語とは異なり、音節末に口蓋化子音 / 非口蓋化子音の対立が生じないからである (ロシア語 {те̣м} /tjem/ <それによって> — {те̣мь} /tjem̐/ <闇> 参照)。この事実とモーラを理解しないロシア人言語学者はしばしば日本語と朝鮮語に口蓋化子音音素を認めてしまう。日本語の [ʈ], [ɖ] は音素 /c/, /z/ をなすが、英語では2つの音素 /ts/, /dz/ をなす (動詞現在3人称単数: /sta:ts/ {starts} <動き出す>, /im'bedz/ {embeds} <埋める>; 名詞複数: /kæts/ {cats} <猫>, /hændz/ {hands} <手>)。

日本人は朝鮮語にはないモーラを持っているために一般に音節末の子音を、日本語の撥音と促音に似て、1モーラで発音する癖がある。そのため例えば朝鮮語 /an̠ɔ̃a/ {안다} <抱く>, /anta/ {안다} <くしない> を日本人は日本語 /anta/ [anta] 「あんた (貴方)」のように発音してしまうので、/n/ の部分が朝鮮人には長めに感じられ、他方朝鮮人の話す日本語で「ン」/n/ の発音が短かめに聞こえるのである。同様に朝鮮語のうち長母音を音素として持つ人の長母音 (1音節) は日本語の長母音 (2モーラ) よりも短い。

音声を扱う分科を音声学、音素を扱う分科を音韻論と呼ぶ。言語学では音韻論を理解することは極めて重要なことである。

7. それでは最終的に日本語と朝鮮語の音素目録を示そう。

日本語

短母音: /i/, /e/ (子音, 撥音, 母音の後ろに立つ), /a/, /o/, /u/ (子音, 撥音, /y/, 母音の後ろに立つ) [語頭と語末に立ち得る]。

長母音: /ii/, /ee/, (子音, 撥音, 母音の後ろに立つ, /aa/, /uu/, /oo/ (子音, 撥音異音, /y/, 母音の後ろに立つ) [語頭と語末に立ち得る]。

二重母音: /ai/, /au/, /oi/, /ui/ (子音, 撥音, /y/, 母音の後ろに立つ) [語頭と語末に立ち得る]。

半母音: /w/ (母音 /a/ の前に立つ。母音, 撥音の後ろに立ち得る), /y/ (母音 /a/, /o/, /u/ の前に立つ。子音, 撥音, 母音の後ろに立ち得る) [語頭に立ち得る] (前に述べたように /w/, /y/ は /u/, /i/ と考えられるが、今半母音 /w/, /y/ と扱うことにする)。

子音: /p/, /t/, /c/, /k/, /b/, /d/, /z/, /g/, /s/, /h/, /m/, /n/, /r/ (母音, /y/ の前のみ立ち得る。母音, 撥音, 促音の後ろに立ち得る) [語頭に立ち得る]。

撥音：/N/（母音の後ろに立つ．母音，半母音，子音の前に立ち得る）〔語末に立ち得る〕．

促音：/q/（母音，撥音の後ろに立つ．子音の前に立ち得る）〔語末に立ち得る〕．

外来語ではすでに音素 /f/ [ɸ]（「ファ」の子音）が生じているといつてよい．次を参照．

/ha/ [ha] ハ /hi/ [çi] ヒ /hu/ [ɸu] フ /he/ [he] ヘ /ho/ [ho] ホ
/fa/ [ɸa] ファ /fi/ [ɸi] フィ /fe/ [ɸe] フェ /fo/ [ɸo] フォ
/hya/ [ça] ヒヤ /hyu/ [çw] ヒュ /hyo/ [ço] ヒョ

子音音素 /t/, /d/, /c/, /z/, /s/ についてももう少し述べる（服部四郎氏による）．

/ta/ [ta] タ /ti/ [ti] ティ /tu/ [tu] トウ /te/ [te] テ /to/ [to] ト
/da/ [da] ダ /di/ [di] ディ /du/ [du] ドウ /de/ [de] デ /do/ [do] ド
/ca/ [tsa] ツァ /ci/ [çi] チ /cu/ [tsu] ツ /ce/ [se] ツェ /co/ [so] ツォ
/za/ [ɬa]/[za] ザ /zi/ [çi]/[zi] ジ,ヂ /zu/ [ɬu]/[zu] ズ,ヅ /ze/ [ɬe]/[ze] ゼ /zo/ [ɬo]/[zo] ソ
/sa/ [sa] サ /si/ [çi] シ /su/ [su] ス /se/ [se] セ /so/ [so] ソ
/cya/ [tʃa] チャ /cyu/ [tʃu] チュ /cyo/ [tʃo] チョ
/zya/ [ɬa]/[za] ジャ, チャ /zyu/ [ɬu]/[zu] ジュ, チュ /zyo/ [ɬo]/[zo] ジョ, チョ
/sya/ [ʃa] シヤ /syu/ [ʃu] シュ /syo/ [ʃo] ショ

アクセントについて音声と音素の関係を述べるならば，日本語の東京方言では「（上り）は意味がないと認められるので，次のようになる．

/cyoosengowa zeqtaitekini muzukasili geɲngode aɽru/.

日本語東京方言のアクセントは音韻論的には1の位置を示せば足りることになる．1を日本では普通アクセント核と呼んでいる．京都式アクセントは東京式よりはるかに複雑である．

朝鮮語

母音：/i/, /e/, /ɛ/, /a/, /ɔ/（半母音 /w/, 子音（初声）の後ろに立ち得る），
/e/, /ɛ/, /a/, /ɔ/, /o/, /u/（半母音 /y/, 子音（初声）の後ろに立ち得る），
/w/（子音（初声）の後ろに立ち得る）．

〔すべての母音は語頭と語末に立ち得る〕．

半母音：/w/（母音 /i/, /e/, /ɛ/, /a/, /ɔ/の前に立ち得る．子音（初声）の後ろに立ち得る），

/y/（母音 /e/, /ɛ/, /a/, /ɔ/, /o/, /u/の前に立ち得る．子音（初声）の後ろに立ち得る）．

〔すべての半母音は語頭に立ち得る〕（前に述べたように /w/, /y/ は /u/, /i/ と考えられるが，今半母音 /w/, /y/ と扱うことにする）．

{-} に対応する /-/ という音素があるのかは非常に疑わしい．あるとすれば唯一の二重母音と言えるが，語頭で /-/, 語中で /|/

である可能性がある。

子音（初声）：（平声）/b/, /d/, /j/, /g/, /s/（母音，鼻音，流音の後ろに立ち得る）；

（激音）/p/, /t/, /c/, /k/；（母音，平音，鼻音，流音の後ろに立ち得る）；

（濃音）/B/, /D/, /J/, /Y/, /G/（母音，平音，鼻音，流音の後ろに立ち得る）；

（鼻音）/m/（母音，鼻音，流音の後ろに立ち得る），/n/（母音，鼻音の後ろに立ち得る）；

（流音）/r/（母音，流音の後ろに立ち得る）；

（声門音）/h/（母音，鼻音，流音の後ろに立ち得る）。

（すべての子音（初声）は母音，半母音の前に立ち得る。ただし音素 /j/, /c/, /J/ は半母音 /y/ の前に立ち得ない）。

[すべての子音（初声）は語頭に立ち得る]。

子音（終声）：（平声）/b/, /d/, /g/（激音，濃音の前に立ち得る）；

（鼻音）/m/, /n/, /ŋ/（平音，激音，濃音，鼻音 /m/, /n/, 声門音 /h/ の前に立ち得る）；

（流音）/r/（平音，激音，濃音，鼻音 /m/, 声門音 /h/ の前に立ち得る）。

（すべての子音（終声）母音の後ろに立ち得る）。

[すべての子音（終声）は語末に立ち得る]。

朝鮮語の終声は子音 1 つからなるが，朝鮮人は誰もが /r/ + /b/, /g/, /m/ を発音できるようである。/babδa/ [pa^ʔta] ~ /barbδa/ [pal^ʔta] 밭다 < 踏む > ; /bagδa/ [pa^{kʰ}ta] ~ /bargδa/ [pal^{kʰ}ta] 밝다 < 明るい > ; /damδa/ [tam^ʔta] ~ /darmδa/ [talm^ʔta] 닮다 < 似る >。朝鮮総督府の正書法でも終声字 ㄹ, ㄴ, ㅁ を認めているのはこのことと関係あるかも知れない。

ソウル方言には高低アクセントはないといってよい。ソウル方言は固定アクセントとして強弱アクセントを持つといえる（語頭に）から，朝鮮人は高さよりも強さに敏感なようである。また朝鮮語のイントネーションについてはまったく意見の一致はなく，課題は今後に残される。

音声記号は []，音素記号は / / の中に記すことは前に述べた。音声記号は普通 IPA（International Phonetic Association 国際音声学協会）の記号を使うのが国際的な慣例だが，これとても正確でさえあれば，ハングル，ラテン字（ローマ字），キリル字（ロシア字），かたかな等何を使ってもかまわないわけである。

音素記号はこれといって決まったものがない。なるべく IPA を使うのがよいが，音素 1 つに 1 つの文字を与えとなると，いろいろと工夫が必要になる。ここに用いた音素記号は梅田博之氏のものに若干の修正を施したものであるが，これもいろいろと工夫を凝らすことができる。

音声記号も音素記号も研究者により、また国により、伝統により微妙に異なり得る。少しばかりの違いはいちいち議論するに足らない。例えば音素記号 /r/ は /l/ とする人もいるであろう。しかしいずれにせよ日本語も朝鮮語も /r/ と /l/ とを音素として区別している英語その他の多くの言語とは異なることに留意されたい。音声記号 [ʁ], [ɽ]; [ʀ], [ɽ] はそれぞれ [ts], [dz], [tʃ], [dʒ] としてかまわない。また [ʀ], [ɽ] をもっと精密に [ɹ], [ɽ] とか [ʁ], [dz] のように表記する必要もない。日本語の [ɯ] の音素記号は簡単に /u/ としてかまわない。要は記号の背景にあるものがきちんと了解されてさえいれば、記号はできるだけ分かりやすい方がよい。音素記号（平音 / 激音 / 濃音）/b/, /p/, /β/, /d/, /t/, /δ/, /j/, /c/, /ʃ/, /g/, /k/, /ɣ/, /s/, /ʂ/ は例えば次のような記号を用いる人もいよう。/p/, /ph/, /pq/, /t/, /th/, /tq/, /c/, /ch/, /cq/, /k/, /kh/, /kq/, /s/, /sq/. この場合は音素をさらに **component** に割ったもので、別の問題がある。音素記号 /j/ は /ɟ/ を用いる人もいる（梅田博之氏）。音声記号 / 音素記号 /u/ [ɯ] を韓国では多く /i/ [i] とする。さらに韓国では「子音＋半母音＋母音」を「子音＋二重母音」と解釈する。すなわち /ya/, /wa/ を /ia/, /ua/ のように上昇的二重母音ととらえるのであるが、ハングルの文字構成上からも、朝鮮人の言語意識からも案外その方がよいかも知れない。日本人のうち服部学派は母音で始まる音（おん）の前には必ず子音音素 /' / を置くが（これはハングル /o/ に対応する。その結果は音節構造が半減する。例：{아이} /ai/（菅野案）、/ 'a'i/（梅田案））、論理的に必ずそうしなければならない必然性がない、また長母音を音素として持つ方言で服部学派は /aa/ のようにあたかもそれが 2 モーラであるかのように示すが、長母音はモーラとは関係ないから、そのようにする理由はない（ただしこのことは例えばモンゴル語のように正書法で長母音を短母音字のダブリで表記することまで否定するものではない。/bata/ 6ar <固い>; /batar/ 6aarap <英雄>）。ただし 나아간다[naaganda] ~ [na:ganda] <進む> は /naaganda/ ~ /nāganda/ としてよいであろう。音声記号にしても有声音には含まれた [h] を [ɦ] と表記する人もいる。平音は初声の場合と終声の場合とを記号で区別することがある。例えば初声 /ɸ/ [p / b], /ɸ/ [t / d], /ɸ/ [k / g]; 終声 /ɸ/ [p / p], /ɸ/ [t / s], /ɸ/ [k / k] のように。ある種の /wi/ [wi] を [ɰi] と表記する人もいる。しかし /ny/ [ɲ], /ry/ [ɽ] をわざわざ [ɲ], [ɽ] と表記するには当たるまい。

8. 必要な時にはハングルを音声記号にも音素記号にも用いることが出来るが、その際は必ず記号で区別すべきである。さらにそれらと文字とを区別する必要があるが、例えば文字に“ ”を付けるか、あるいは無記号と決めればよい。ただし常に原則は一貫していなければならない。例：“ㄱ”/ㄱ/[ㄱ]。

音素と文字の違いは厳格でなければならない。例：母音—母音字，初声—初声字，終声—終声字，平音—平音字等。合成された母音字のうちあるもの

(2つの母音字)(ㅏ, ㅑ)は1つの母音を示すが, あるもの(2つあるいは3つの母音字)(ㅓ, ㅕ, ㅗ, ㅛ)は2つの音素(半母音+母音)を示す. これらの母音字を二重母音と言ってはいけない. 例えば말은の終声字ㅓは初声として発音され(/마른/), 激音字, 濃音字は常に激音, 濃音として読まれるが, 平音字はある時に濃音として読まれる(절대/절때/<絶対>, 확대/확때/<拡大>). “한국말”<朝鮮語>の終声字ㅓとㅗはともに終声 /o/ となるように.

言語は通時的な変種(例えば中期朝鮮語と現代朝鮮語)と共時的な地域的な変種(ソウル方言, 慶尚道方言等)と文体的な変種(標準語, 書き言葉, 話し言葉等)を厳密に区別しなければならない. 中期朝鮮語の二重母音は現代朝鮮語では多く単母音となっている.

文字の数え方さえ国によって一致しないから, 例えば合成された母音字を2つとするか, 1つとするかは, いちいち典拠を示した方がよい.

また「標準語の母音」というような曖昧な表現は避けた方がよい. 標準語という人工的なものの実態が必ずしも明瞭でないからである. 例えば北朝鮮で1つの母音としているㅓ [o], ㅕ [y] はソウルその他の多くの方言で /we/, /wi/ であり, すでに単母音とはいえない. ㅕ /wi/ [wi] は歯音 /d/, /t/, /ʈ/; /s/, /g/; /z/, /c/, /ʒ/; /n/ の後ろでは [ʷi] となることがある. しかも /swi/ は [ʃʷi] となる. 次の場合を参照せよ. 쇠 [swe]~[sø]<鉄>, 인쇄 [inswe]~[inswɛ]<印刷>, 볼셰위끼 [polʃewiʔki]<ボリシェヴィキ>. この場合 [swe] と [ʃe] とは音韻論的にどのように区別されるのだろうか? このように朝鮮語の母音の音声だけでなく母音音素の数さえ安易には決められないのである. 具体的にどこの方言の何歳代の人と言語と特定するべきである. ソウルの若い世代ではもはや /e/ と /ɛ/ の区別がなく, /e/ だけになった. その結果文字 “ㅐ, ㅑ, ㅓ” は現在すべて /we/ となってしまった. 現在韓国人が됐다<よろしい>をしばしば間違えて왔다고書いてしまうことがこのことをよく物語っている.

(A) 例えば単語 “한국말” “はいわゆる標準語では /한국말/ /hangunmar/ ということあるが, 現実には /항군말/ /hangunmar/ と発音されることが多い. ソウル方言にはこのように普通の速度の発音と速い速度の発音とが区別される. 一応 /한국말/ /hangunmar/ は前者, /항군말/ /han-gunmar/ は後者とし得るが, さほど明瞭に区別されるわけではない. 後者の文体的特徴として次のものが挙げられる.

鼻音 /n/ + 唇音

↓

唇音 /m/

①

鼻音 /n/ + 軟口蓋音

↓

軟口蓋音 /ŋ/

②

歯音 /d/ + 激音, 濃音

↓

Ø

③

/b/ + /p/, /β/	/g/ + /k/, /γ/	唇音 /m/, /b/ + 軟口蓋音
↓	↓	↓
∅	∅	軟口蓋音 /ŋ/, /g/
③'	③"	④

例 : ① 신문 /신문/ /sinmun/ → /심문/ /simmun/ <新聞>.

② 한국 /한국/ /hangug/ → /항국/ /hangug/ <韓国>.

③ 좋다 /잘타/ /jodta/ → /조타/ /jota/ <よい>.

있다 /있다/ /id̥sa/ → /이따/ /i̥sa/ <いる>.

③' 집보다 /집보다/ /jib̥boda/ → /지보다/ /ji̥boda/ <家より>.

③" 먹고 /먹고/ /m̥ogyo/ → /머고/ /m̥yo/ <食べて>.

④ 잠깐 /잠깐/ /jamyan/ → /장깐/ /jan̥yan/ <しばらく>.

십구 /십구/ /sib̥yu/ → /식구/ /sig̥yu/ → /시구/ /si̥yu/ <十九>.

これには次のものも加わるかも知れない。しかしこれはあらゆる語彙について行われるわけではない。/저녁/ {전·화} <電話>は現在では初めから /h/ はないといってよいかも知れない。

有声音 + /h/ + 有声音

↓

∅

9. さて次の文を見られたい。ハングルが1次的に文節ごとに分かち書きされることが分かる。文節とは日本語でも朝鮮語でも1次的に取り出され得る呼吸段落である。文節は韓国では普通 어절 (語節) と呼ばれる。

ハングル : “한국말은 절대적으로 어려운 언어이다.”

音素表記 : /hangunmarun j̥ald̥ɕɔgwro ɔryɔun ɔnɔida/

ハングル発音表記 : /항궁마룬 절대저그로 어려운 어너이다/

これを見ると普通社会でハングルで書かれる表記とハングル発音表記(音素表記)が少し違うことに気づく。社会でハングルで書かれる表記は音素表記ではないことになるが、このように一定の原則に従って書かれる言語表記の規則を正書法と呼ぶ。文明国の言語は大体自己の言語の正書法を定めている。日本の現代仮名遣いも一種の正書法である。英語のように綴りについての規則がなく、単語の語形をほとんど辞典に頼っている言語もある。朝鮮語の正書法は極めて複雑である。ハングル音素表記を正書法に基づく表記に転換するためにはいろいろな規則がある。

まず朝鮮語の正書法は単語の境界を区切る。従って /한국마룬 절대저그로 어려운 어너이다/ → /한국말-은 절대적-으로 어려운

어녀-이다/. この場合形態素の末音の子音が母音から分離されて終声として表記される。

単語はさらに形態素に分割される。その際漢字語の場合は漢字の境界も示される。/어녀/ → {언-어}。漢字1字を漢字形態素と呼ぶことが出来るだろう。このようにして次のものも得られる。/절때/ → {절대}, /한글·말/ → {한국·말}。{ } 内は現行正書法による綴り。

(B) /절때/ → {절대} では特殊に漢字語だけの次のような規則が生ずる。この点では韓国と北朝鮮との違いはない。

流音 /ㄹ/+平音 /ㄷ/, /ㅌ/, /ㅍ/
↓
濃音 /ㄸ/, /ㅌㅌ/, /ㅍㅍ/
⑤

例：⑤/달·필/ {달·필} <達筆> — /발·말/ {발·말} <發達>。
/전·시/ {전·시} <展示> — /발·전/ {발·전} <發展>。
/신·서/ {신·서} <信書> — /발·신/ {발·신} <発信>。

(C) /한글·말/ → {한국·말} は漢字語+固有語のものである。いずれにせよここからは次の規則が導き出される。

平音+鼻音	流音/ㄹ/+鼻音/ㄴ/	鼻音/ㄴ/+流音/ㄹ ⁽¹⁾
↓	↓	↓
鼻音	流音 /ㄹ/	流音/ㄹ/
⑥	⑦	⑧

鼻音/ㄴ/+流音/ㄹ ⁽²⁾	鼻音 /ㄴ/, /ㅇ/+流音 /ㄹ/
↓	↓
鼻音 /ㄴ/	鼻音 /ㄴ/
⑨	⑩

[註] (1) 漢字語語幹 (漢字2字からなる) の内部で。

(2) 漢字語語幹と接尾辞の間で。また接頭辞と語幹の間あるいは語幹と語幹の間 (いずれも語幹は非漢字語) で。

北朝鮮では標準語で⑨と⑩の交替を認めていない。さらに正音法では文字 ㄹ は常に /ㄹ/ と読まれる。正音法とは公的に認められた発音である。韓国は一番新しい正書法で正音法が作られた。それによると母音の長短が認められているが、北朝鮮はそれを認めない。新正書法では例えば /멀:다/ {멀다}

<遠い>—/머리/ {머어} のように長母音と短母音の交替のあるものがあるが、これについては菅野裕臣他編、『コスモス朝和辞典』、白水社、1988 に完全に反映されている。

例：⑥ /밥/ {밥} <ご飯>—/바른/ {밥-은} <ご飯は>—/밤-만/ {밥-만} <ご飯だけ>。

/밥/ {밥} <畑>

—/반-만/ (/밤만/) {밭-만}

<畑だけ>。

/책/ {책} <本>—/채근/ {책-은} <本は>—/챙-만/ {책-만} <本だけ>。

⑦ /신-년/ {신-년} <新年>—/칠-년/ {칠-년} <七年>。

/날/ {날} <日>—/화요일-날/ {화요일-날} <火曜日>。

⑧ /권-세/ {권-세} <権勢>—/권력/ {권-력} <権力>。

⑨ /기-력/ {기-력} <氣力>，/실-력/ {실-력} <實力>—/생산-력/ {생산-력} <生産力>。

/라면/ {라면} <ラーメン>—/신-라면/ {신-라면} <辛ラーメン>。

⑩ /기-력/ {기-력} <氣力>，/실-력/ {실-력} <實力>—/학-력/ {학-력} <学力>，

/담-력/ {담-력} <胆力>，/동-력/ {동-력} <動力>。

つまり朝鮮語では鼻音の前で平音は必ず鼻音化する。形態素頭音の平音は /ㄷ/ の後ろで濃音と (⑤の場合)，形態素末音の平音は鼻音の前で鼻音と (⑥の場合) 交替を起こすが，正書法は濃音と交替を起こす平音，鼻音と交替を起こす平音を常に平音字によって記すのである。この場合平音が常に平音を保つ位置，すなわち語末あるいは母音の前の位置を強い位置，平音が濃音や鼻音に変わる位置，すなわち /ㄷ/ の後ろや鼻音の前の位置を弱い位置と呼ぶが，朝鮮語の正書法は強い位置の音素を基本形と認めるのである。このような強い位置の音素と弱い位置の音素の交替を形態音素論的交替と呼ぶ。さらに鼻音 /ㄴ/ は流音 /ㄷ/ と隣り合う時は (⑦，⑧の場合) 流音 /ㄷ/ と交替するが，/ㄴ/ は強い位置，/ㄷ/ は弱い位置の音素である。また流音 /ㄷ/ がある条件において (⑨，⑩の場合) 鼻音 /ㄴ/ と交替するが，この場合は /ㄷ/ は強い位置，/ㄴ/ は弱い位置の音素である。朝鮮語は，ロシア語と並んで，形態音素論的交替の著しい言語である。例えば /달/ ~ /달/ (/밭-달/ における) <達>，/밥/ ~ /밤/ (/밤-만/ における) <ご飯> のような交替する形態素における音素 /ㄷ/ ~ /ㄷ/，/ㄷ/ ~ /ㄷ/，及び上記の ⑦/⑧，⑨/⑩における交替する形態素における音素 /ㄴ/ ~ /ㄷ/，/ㄷ/ ~ /ㄴ/ (すなわち形態音素論的交替) を「形態音素」という人がいて，それを {ㄷ}，{ㄷ}，{ㄴ}，{ㄷ} と表示したりする。形態音素については議論のあるところだが，いずれにせよ朝鮮語においては強い位置の音素が正書法で表記されるのである。

いずれにせよ⑥～⑩のような純粋な形態音素論的交替は①～④のような任意的な交替から区別しなければならない。

(D) さらにいわゆる標準語の次の場合を参照せよ。()内は早い速度の発音, []内はソウルの日常的な形, 以下のもののうち * を付したものはずっと下に説明がある。

形態素頭音(初声) 母音, 鼻音, 流音の次の音素が強い位置の音素 ({ } の中)

(1) 用言語尾形態素

{ㄷ} /가·다/ {가·다}<行く>—/알·다/ {알·다}<知る>—/먹·따/ {먹·다}<食べる>; /안·따/ {안·다}*<抱く>; /남·따/ {남·다}*<残る>—/존·타/ (/조타/) {종·다}<よい>; /만·타/ {많·다}<多い>; /일·타/ {일·다}<失う>.

{ㅈ} /가·지/ {가·지}<行くよ>—/알·지/ {알·지}<知るよ>—/먹·찌/ {먹·지}<食べるよ>; /안·찌/ {안·지}*<抱くよ>; /남·찌/ {남·지}*<残るよ>—/존·치/ (/조치/) {종·지}<よいよ>; /만·치/ {많·지}<多いよ>; /일·치/ {일·지}<失うよ>.

{ㄱ} /가·고/ {가·고}<行つて>—/알·고/ {알·고}<知つて>—/먹·꼬/ {먹·고}<食べて>; /안·꼬/ (/앙꼬/) {안·고}*<抱いて>; /남·꼬/ (/낭꼬/) {남·고}*<残つて>—/존·코/ (/조코/) {종·고}<よくて>; /만·코/ (/망코/) {많·고}<多くて>; /일·코/ {일·고}<失つて>.

(2) 用言以外の品詞の形態素

{ㅂ} /대구·발/ {대구·발}<大邱発>, /처람·발/ {철암·발}<鉄岩発>, /부산·발/ {부산·발}<釜山発>, /서울·발/ {서울·발}<ソウル発>, /동경·발/ {동경·발}<東京発>—/뉴욕·발/ {뉴욕·발}<ニューヨーク発>.

/나·보다/ {나·보다}<わたしより>, /남·보다/ {남·보다}<他人より>, /강·보다/ {강·보다}<川より>, /산·보다/ (/삼·보다/) {산·보다}<山より>, /말·보다/ {말·보다}<話より>, /여덟·보다/ {여덟·보다}<八つより>—/밥·뽀다/ (/바뽀다/) {밥·보다}<飯より>, /맛·뽀다/ (/마뽀다/) {맛·보다}<味より>, /약·뽀다/ {약·보다}<薬より>.

{ㄷ} /두·달/ {두·달}<ふた月>, /한·달/ {한·달}<ひと月>—/다섯·달/ (/다서·달/) {다섯·달}<いつ月>/식·달/ {식·달}<み月>.

/나·도/ {나·도}<わたしも>, /남·도/ {남·도}<他人も>, /강·도/ {강·도}<川も>, /산·도/ {산·도}<山も>, /말·도/ {말·도}<話も>, /여덟·도/ {여덟·도}<八つも>—/밥·또/ {밥·도}<飯も>, /맛·또/ (/마또/) {맛·도}<味も>, /약·또/ {약·도}<薬も>.

{ㅈ} /낚시·질/ {낚시·질}<釣り>, /선생·질/ {선생·질}<先生稼業>—/툰·질/ {툰·질}<のこぎり仕事>, /도둑·질/ {도둑·질}<泥棒稼業>.

/나·조차/ {나·조차}<わたしさえ>, /남·조차/ {남·조차}<他人さえ>.

/강·조차/ {강·조차} <川 さ え>, /산·조차/ {산·조차} <山 さ え>, /말·조차/ {말·조차} <話 さ え>, /여덟·조차/ {여덟·조차} <八 つ さ え>—/밥·조차/ {밥·조차} <飯 さ え>, /만·조차/ (/마조차/) {만·조차} <味 さ え>, /약·조차/ {약·조차} <藥 さ え>.

{入} /두·시/ {두·시} <2 時>, /한·시/ {한·시} <1 時>—/일곱·씨/ {일곱·씨} <7 時>, /다섯·씨/ (/다섯·씨/) {다섯·씨} <5 時>.

{ㄱ} /남·과/ (/남과/) {남·과} <他人と>, /강·과/ {강·과} <川と>, /산·과/ (/상·과/){산·과} <山 と>, /말·과/ {말·과} <話 と>, /여덟·과/ {여덟·과} <八 つ と>—/밥·과/ (/바과/) {밥·과} <飯 と>, /만·과/ (/마과/) {만·과} <味と>, /약·과/ (/야과/) {약·과} <藥と>.

以上は次のような交替 (⑪) に基づくものであるが, さらに⑫のようなものがある.

平音+平音

↓

濃音

⑪

激音, 濃音, 2つの子音+子音 (あるいは 0)

↓

平音, 1つの子音

⑫

(E) 以下は⑫の場合である. ⑥~⑫はすべて朝鮮語の音素の結合に関する内的な規則によって生じたものであるが, ⑫の場合 2つの子音のうちどちらが選択されるかは内的には決められない.

形態素末音 (終声) (体言, 用言) 母音の前の音素が強い位置の音素 ({ } の中).

{ㅈ} /집/ {집} <藁>—/집픈/ (/지픈/) [지븐/] {집·은} <藁 は>—/집·만/ {집·만} <藁だけ>.

/집·따/ {집·다} <深い>—/집픈/ (/기픈/) {집·은} <深い>—/집·네/ {집·네} <深いよ>.

{ㅊ} /값/ {값} <値>—/값쁜/ [가븐/] {값·은} <値は>—/값·만/ {값·만} <値段だけ>.

/값·따/ {값·다} <ない>—/값쁜/ {값·은} <なかった>—/값·네/ {값·네} <ないよ>.

{ㄷ} /밟·따/ (1) {밟·다} <踏む>—/밟쁜/ {밟·은} <踏んだ>—/밟·네/ {밟·네} <踏むね>.

{ㄹ} / 읊·따/ {읊·다} <詠ずる>—/읊쁜/ {읊·은} <詠じた>—/읊·네/ {읊·네} <詠ずるね>.

{ㅍ} /발/ {발} <畑>—/발쁜/ (/바쁜/) {발·은} [바쁜/] <畑は>—/발·만/ (/발·만/) {발·만} <畑だけ>.

- /뱀·따/ (/배따/) {뱀·다} <吐く>—/뱀튼/ (/배튼/) {뱀·은} <吐いた>—/뱀·네/ {뱀·네} <吐くね>.
- {ㅅ} /낱/ {낱} <鎌>—/나순/ {낱·은} <鎌は>—/난·만/ (/남·만/) {낱·만} <鎌だけ>.
- /씻·따/ (/씨따/) {씻·다} <洗う>—/씻순/ {씻·은} <洗った>—/씻·네/ {씻·네} <洗うね>.
- {ㅅ} /인·따/ (/이따/) {있·다} <ある>—/일순/ (/이순/) {있·은} <あった>—/인·네/ {있·네} <あるね>.
- {ㅅ} /날/ {낱} <昼>—/나즌/ [나순/] {낱·은} <昼は>—/난·만/ (/남·만/) {낱·만} <昼だけ>.
- /낮·따/ (/나따/) {낮·다} <低い>—/나즌/ {낮·은} <低い>—/난·네/ {낮·네} <低いね>.
- {ㅈ} /빔/ {빔} <光>—/빔춘/ (/비춘/) [비순] {빔·은} <光は>—/빔·만/ (/빔·만/) {빔·만} <光だけ>.
- /쫓·따/ (/쫓따/) {쫓·다} <追う>—/쫓춘/ (/쫓춘/) {쫓·은} <追った>—/쫓·네/ {쫓·네} <追うね>.
- {ㅋ} /부엌/ {부엌} <台所>—/부엌큰/ (/부어큰/) [부어근] {부엌·은} <台所>—/부엌·만/ {부엌·만} <台所だけ>.
- {ㄱ} /밖/ {밖} <外>—/밖큰/ (/바큰/) {밖·은} <外は>—/방·만/ {밖·만} <外だけ>.
- /낚·따/ {낚·다} <釣る>—/낚큰/ (/나큰/) {낚·은} <釣った>—/낚·네/ {낚·네} <釣るね>.
- {ㅈ} /삿/ {삿} <賃金>—/삿순/ [사근/] {삿·은} <賃金は>—/삿·만/ {삿·만} <賃金だけ>.
- {ㄹ} /닭/ {닭} <鶏>—/달근/ [다근/] {닭·은} <鶏は>—/당·만/ {닭·만} <鶏だけ>.
- /익·따/ (1) {읽·다} <読む>—/일·꼬/ {읽·고} <読んで>—/일근/ {읽·은} <読んだ>—/잉·네/ {읽·네} <読むよ>.
- {ㅈ} /안·따/ {앉·다} * <座る>—/안즌/ {앉·은} <座った>.
- {ㄹ} /할·따/ {할·다} * <なめる>—/할튼/ {할·은} <なめる>.
- {ㄹ} /여덟/ {여덟} <八つ>—/여덟븐/ (/여더튼/) {여덟·은} <八つは>.
- /넓·따/ {넓·다} * <広い>—/넓븐/ {넓·은} <広い>.
- {ㄹ} /점·따/ {점·다} * <若い>—/절븐/ {점·은} <若い>.
- [註] (1) /밟·따/ {밟·다} <踏む>, /익·따/ {읽·다} <読む>을それぞれ /발·따/, /일·따/ と読む人が多いが, それはこの形が半ば人工的な形であるためにそう読まれただけのことであろう.

(F) 以上 (D), (E) で * をつけたものは次の点で特殊である. すなわち本来次に来る平音を濃音化させる内的必然性を持たないはずなのに濃音化が

起きているのである。現行正書法は、このような交替（平音—濃音—激音。例えば /다/, /따/, /타/）において形態素の形を一定に保つために、平音（例えば {다}）を基本形と定めた。その結果はこの場合の「激音」を「ㅎ+平音」（{ㅎ다}）のように考えた。

{하} /마는/ {많-은} <多い>—/만-타/ {많-다} <多い>.

{라} /이른/ {잃-은} <失った>—/일-타/ {잃-다} <失う>.

{하} /조은/ {좋-은} <よい>—/존-타/ (/조타/) {좋-다} <よい>—/존네/ {좋-네} <よいよ>

またそれならばこのような交替における「濃音」もまた「X+平音」と考えてしかるべきだが、現行正書法では何の表記もしない（{다} のまま）。

{ㄴ} /아는/ {안-은} <抱いた>—/안-따/ {안-다} <抱く>.

{ㄹ} /나른/ {남-은} <残った>—/남-따/ {남-다} <残る>.

上記のうち {하} と {라}, {ㄴ} と {ㄹ}（実は {ㄴ X}, {ㄹ X}）は強い位置の音素が子音の前であるのに、(E) では母音の前が強い位置である点異なる。

ところで (E) のうち {하}; {라}, {ㄴ}, {ㄹ} は実は母音の前を強い位置とする {하}; {라}, {ㄴ}, {ㄹ} と子音の前を強い位置とする {ㄴ X}; {ㄹ X}, {ㄴ X}, {ㄹ X} の複合であることが分かる。すなわち論理的に表すとすれば、それらは {하 X}; {라 X}, {ㄴ X}, {ㄹ X} とでもなる。

これらのうち {하}; {라}, {ㄴ} の場合最後の終声が次に来る平音を濃音化したとする説明が従来行われてきた。歴史的にはいざ知らず, /ㄹ/ を語幹末音とする用言のうち ㄹ 語幹用言（いわゆる ㄹ 変格用言）だけが平音で始まる語尾を従えることができ、子音語幹用言で /ㄹ/, /ㄹ/, /ㄴ/ を末音とするものがすべて（結局はすべての子音語幹用言が）濃音で始まる語尾を従えることが上の説明では尽くされない。さらに次の例をも参照せよ。{여덟이}/여덟비/（書き言葉）～/여덟리/（話し言葉）<八つが>, {여덟도}/여덟도/<八つも>（ここで /도/ であることに注意せよ）。

朝鮮語でこの X を正書法で示さないのは、第 1 に X の実体が明瞭でないこと、第 2 にこの X が用言にしか現れないことによる。

また {하} の特殊な点は弱い位置で子音が ㄹ になることである。

このような特殊な 하 や X を含むものを擬似的な形態音素論的交替と呼ぼう。ただし次のものと比較せよ。/개/ {개} <犬>—/수-개/ {수-개} <雄犬>, /암-개/ {암-개} <雌犬>; /닭/ {닭} <鶏>—/수-닭/ {수-닭} <雄鶏>, /암-닭/ {암-닭} <雌鶏>。{술}, {값} という表記をしていないことに注意せよ。

/하/+平音

↓

激音

⑬

/X/+平音

↓

濃音

⑭

以上を整理する.

任意的な交替 (A) (①~④)

全体的な交替

形態音素論的交替 (C) (⑥~⑩), (D) (⑪) (E) (⑫)

擬似的な形態音素論的交替 (F) (⑬, ⑭)

部分的な交替

漢字語 (B) (⑤)

概して正書法が全体的な交替のうち強い位置の音素を表記しようとしていることが分かる. (A)>(C)>(D), (E), (F) のように交替の序列があり, 例えば (D) は (C) も (A) も持ち得る.

10. 部分的な交替にはさらに次のようなものがある.

(G) 漢字語で	語頭で	語頭で	語頭で
	/ㄴ/+i/, /y/	/ㄹ/+i/, /y/以外	/ㄹ/+i/, /y/
	↓	↓	↓
	Ø	/ㄴ/	Ø
	⑮	⑯	⑰

語中で; 母音, /ㄴ/ の後ろで

/렬/	/를/
↓	↓
/열/	/을/
⑱	⑲

⑰は⑮と⑯の複合である.

北朝鮮ではこれらの交替を認めない. 韓国ではこれらの交替はそれぞれの項を音素表記する. この点韓国の正書法は不徹底というべきである.

例: ⑮ /분·뇨/ {분·뇨} <糞尿> - /요·도/ {南 요·도} {北 뇨·도} <尿道>.

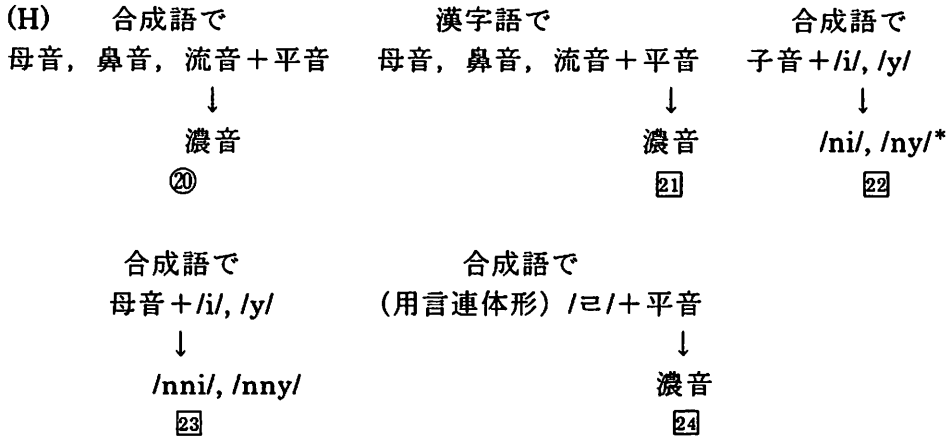
⑯ /개·론/ {개·론} <概論> - /논·쟁/ {南 논·쟁} {北 론·쟁} <論争>.

⑰ /물·리/ {물·리} <物理> - /이·론/ {南 이·론} {北 리·론} <理論>.

⑱ /열·렬/ {열·렬} <熱烈> - /우·열/ {南 우·열} {北 우·렬} <優劣>, /서·널/ {南 선·열} {北 선·렬} <先烈>.

⑲ /자살·률/ {자살·률} <自殺率> - /지·지·을/ {南 지·지·을} {北 지·지·를} <支持率>, /백·분·율/ {南 백·분·을} {北 백·분·를} <百分率>.

なお人によって /서·널/ {南 선·열} {北 선·렬} <先烈>, /백·분·율/ {南 백·분·을} {北 백·분·를} <百分率>を /선·널/, /백·분·율/ のように発音する.



* /ㄷ/ の後ろでは /ri/, /ry/ となる.

例: ㉔/바닥/ <平面> — /마를·빠닥/ (마루·빠닥) {마룻·바닥} <床>,
 /땅·빠닥/ (땅·바닥) <地面>, /손·빠닥/ {손·바닥} <手のひら>,
 /발·빠닥/ {발·바닥} <足の裏>.
 /가·엷씨/ {가·없·이} <果てしなく> — /넌·까/ (내·까) {넋·가} <小川のふち>,
 /강·까/ {강·가} <川辺>, /물·까/ {물·가} <水辺>.

これは基本的に「形態素 + /ㄷ/ (弱い位置) + 形態素」という構造をなすが、この構造は次のように南北朝鮮でさまざまな表記を経てきた。

韓国 (現行正書法)

第1形態素の末音が母音 (母音の次に終声 {ㄹ} を書く) — 第1形態素の末音が子音 (なにも書かない). この {ㄹ} を “사이 시옷” (間の시옷) と呼ぶことがある. しかしかつて次のようにこの位置に {ㅁ} があらゆる場合に書かれることがあった.

{마룻·바닥} — {마루·ㅁ·바닥}; {땅·바닥} — {땅·ㅁ·바닥}.

北朝鮮 (現行正書法)

第1形態素と第2形態素の間に常に何も書かない.

{마룻·바닥} — {마루·바닥}; {땅·바닥} — {땅·바닥}.

しかし 1966 年の正書法ではこの位置に次のように “ ’ ” が書かれたことがあった. “ ’ ” を «사이표» (間の印) と呼んだ.

{마룻·바닥} — {마루·'·바닥}; {땅·바닥} — {땅·'·바닥}.

北朝鮮 (現行正書法) のものは例えば日本語の漢字表記「箱 (はこ)」 — 「重箱 (じゅう·ばこ)」に似て何の添加も施さないものであり、北朝鮮 (旧正書法) も韓国 (旧正書法) もここになんらかの記号を与えたが、韓国 (現行正書法) はこの点で極めて不統一である.

なお次のものを参照. /뱃노리/ {南 (現行) 뱃·놀이} {南 (旧) 배·ㅁ·놀이} {北 (現行) 배·놀이} {北 (1966 年) 배·'·놀이} <舟遊び>.

例 : ㉑ /가·치/ {가·치} <価値>—/대·까/ {대·가} <対価>, /단·까/ {단·가} <單価>/평·까/ {평·가} <評價>, /물·까/ {물·가} <物価>.

/병·명/ {병·명} <病名>—/위·땡/ {위·병} <胃病>, /저·넘·땡/ {전·염·병} <伝染病>.

/점·선/ {점·선} <点線>—/채·점/ {채·점} <採点>, /중·점/ {중·점} <終点>, /만·점/ {만·점} <満点>.

この場合漢字語 (B) の㉑と同じく南北朝鮮ともになんらの改変も行わない.

例 : ㉒ /역/ {역} <駅>—/처·람·녁/ {철·암·역} <鉄岩駅>, /동·경·녁/ {동·경·역} <東京駅>/부·산·녁/ {부·산·역} <釜山駅>—/서울·력/ {서울·역} <ソウル駅>—/서울·려·감·녁/ {서울·역·앞·역} <ソウル駅前駅>, /안·국·녁/ {안·국·역} <安国駅>.

/일/ {일} <仕事>—/밤·닐/ {밤·일} <夜の仕事>, /논·닐/ {논·일} <田の仕事>/반·닐/ {밭·일} <畑仕事>.

いわゆるリエーゾンの現象である. フランス語の場合例えば /vudɔne/ {vous donnez} <あなたが与える>—/vuzɛme/ {vous aimez} <あなたが愛する>のように /vu/~/vuz/ という形態素での「Ø~子音」という交替が第1形態素末尾の位置で起こるのに対して, 朝鮮語では/나무·옆/ {나무·옆} <木の横>—/집·옆/ {집·옆} <家の横>—/발·옆/ {발·옆} <足の横>のように形態素での「Ø~子音」という交替が第2形態素頭部の位置で起こるという違いがある. これが典型的なリエーゾンであって, フランス語で /ilɛm/ {il aime} <彼は愛する>におけるように Ø との交替が起きない場合の子音と母音の連結は **enchaînement** と呼ばれる.

例えば朝鮮語の文 /우·림·만·널·모·뎌/ {을·엄·만·널·못·와.} <うちのお母さんは明日来られない. >のうち /우·림·만/ {을·엄·만}, /모·뎌/ {못·와} のような単語の結合に際して子音と母音とを連結させることをリエーゾンと呼ぶ人がいるが, それは甚だしい誤りである. 朝鮮語は **enchaînement** の甚だしい言語である. リエーゾンは南北朝鮮ともに現在は何にも書かないが, かつて北朝鮮では 1966 年の正書法で固有語に限って「사이표」“'” を付したことがある. {밤·일}—{밤·'·일}, {논·일}—{논·'·일}, {밭·일}—{밭·'·일}.

例 : ㉓ /이/ {이} <齒>—/원·니/ {南·윗·니} {北 (現行) 우·이} {北 (1966 年) 우·'·이} <上齒>.

これは「/ㄷ/ (“사이 시옷”) +リエーゾン」の例であるが, 北朝鮮では ㉒と同じように書かれる. この点で韓国の表記は極めて不徹底である.

例 : ㉔ /쇠/ {쇠} <鉄>—/열·쇠/ {南北 (現行) 열·쇠} {北 (1966 年) 열·'·쇠}.

これは㉑と同じく扱われる.

11. (A) (①~④), (C) (⑥, ⑦, ⑨), (D) (⑪), (H) (㉒, ㉔) は単語内部ではなく単語と単語の間でも生じ得る. 厳密には文節と文節の間である.

(A)① /한·분/—/합분/ {한 분} <お一人>.

② /한·군데/—/항군데/ {한 군데} <1箇所>.

③ /맛·쫄은/—/마쫄은/ {맛 좋·은} <味のよい>.

④ /집·꾸석/—/지꾸석/ {집 구석} <家の隅>.

(C)⑥ /아직/{아직} <まだ>—/아직 멀·었·다/ {아직 멀·었·다} <まだ遠い>.

⑦ /놈/{놈} <奴>—/주길·롬/ {죽일·놈} <殺すべき奴>.

⑨ /라디오/ {라디오} <ラジオ>—/비싼·나디오/ {비싼 라디오} <高いラジオ>.

⑩ /리터/{리터} <リットル>—/삼·니터/ {삼 리터} <3リットル>.

(D)⑪ /쫄·타/ (/쫄타/) {쫄·다} <よい>—/떡·쫄·타/ (/떡·쫄타/) {떡 좋·다} <とてもよい>.

(H)㉒ /엮/{엮} <横>—/집·옆/ {집 옆} <家の横>.

/열·다/{열·다} <開く>—/안·널·다/{안 열·다} <開かない>, /몬·널·다/{못 열·다} <開けない>.

/여·자/{여자} <女>—/갈·려·자/{갈 여자} <行くべき女>.

㉔ /사·람/{사람} <人>—/갈·싸·람/{갈 사람} <行くべき人>.

12. (E) ㉔はいわゆる形態音素の現れが特殊なものがある.

(I) ㅍ+	ㅍ+/y/	ㅈ+이	ㅈ+히	ㅈ+ㅎ+/y/	[強い位置]
↓	↓	↓	↓	↓	
치	츠	지	치	츠	[弱い位置]
	㉔		㉔	㉔	

激音, 濃音, 2つの子音+母音 [強い位置]

↓

平音, 1つの子音 [弱い位置]

㉔

例: ㉔ /받/{받} <畑>—/받·튼/ (/바튼/) [바·슨/] {받·은} <畑は>—/받·치/ (/바치/) [바·시/] {받·이} <畑が>.

㉔ /굳·따/ (/구따/) {굳·다} <固い>—/굳·튼/ {굳·은} <固い>—/구·지/ {굳·이} <固く>.

㉔ /붙·따/ (/부따/) {붙·다} <付く>—/붙·튼/ (/부튼/) {붙·은} <付いた>—/붙·친/ (/부친/) {붙·힌} <付けた>—/붙·쳐/ (/붙쳐/) {붙·혀} <付けて>.

/홀·따/ {홀·다} <しごく>—/홀·튼/ {홀·은} <しごいた>—/홀·친/

{흙·인}<しごかれた>—/홀쳐/ {홀여}<しごかれて>.

母音の前の強い位置の音素はあくまでも語尾、接尾辞、助詞に限る。それ以外の形態素の前では弱い位置の音素が現れる。これはまた 11. のように単語と単語の間でも生ずる。

例: ㉔

{ㅍ} /무릎/ {무릎}<ひざ>—/무릅·폰/ (/무르폰/) [무르븐/] {무릎·은}<ひざは>—/무르뵈/ {무릎 위}<ひざの上>.

{ㅅ} /갑/ {값}<値>—/갑썌/ [가븐/] {값·은}<値 是>—/가버치/ {값·어치}<値打ち>.

{ㅌ} /팥/ {팥}<小豆>—/팥·튼/ (/파튼/) {팥·은}<小豆は>—/팥·치/ (/파치/) {팥·이}<小豆が>—/파달/ {팥·알}<小豆の粒>.

{ㅍ} /옴/ {옷}<服>—/오슨/ {옷·은}<服は>—/오단/ {옷 안}<服の中>.

{ㅈ} /젖/ {젖}<乳>—/저즌/ [저슨/] {젖·은}<乳 是>—/저더미/ {젖·어미}<乳母(卑称)>.

{ㅌ} /옴/ {옷}<漆>—/옴즌/ (/오즌/) {옷·은}<漆 是>—/오도르다/ {옷·오르다}<漆にかぶれる>.

{ㅍ} /부엌/ {부엌}<台所>—/부엌·큰/ (/부어큰/) [부어근/] {부엌·은}<台所は>—/부어간/ {부엌 안}<台所の中>.

{ㄹ} /닭/ {닭}<鶏>—/달근/ [다근/] {닭·은}<鶏は>—/다잡/ {닭 앞}<鶏の前>.

{ㄷ} /맏형/ (/마형/) {맏·형}<長兄>—/마지/ {맏·이}<長子>*.

*この形は弱い位置のものとは言えない。単独で強い位置の形が現れない例である。

13. 朝鮮語の正書法には部分的に問題も多い。以下に若干の問題点を示す。

現代朝鮮語では平音の後ろには平音は立たず、濃音と激音が立ち、かつ強い位置の平音はこの位置で濃音と交替するので、平音の後ろの位置で平音と濃音は中和するという。中和(neutralization)とは音素の対立が中立化する、すなわちなくなることであり、ほとんどが弱い位置として機能する。だいたい弱い位置では強い位置の音素(「形態音素」)が表記されるというのが多くの言語でなされてきた習慣であり、朝鮮語も例外ではない(上記(C), (D), (E) 参照)。例: 朝鮮語 /나슨/ {낫·은}<鎌は>—/낫/ {낫}<鎌>, {낫}<昼>—/나즌/ [나슨/] {낫·은}<昼は>—/난만/ (/남만/) {낫·만}<鎌だけ>, {낫·만}<昼だけ>; ドイツ語 /ra:ts/ {Rate}<輪(与格)>—/ra:t/ {Rat}<輪(主格)>, {Rad}<忠告(主格)>—/'ra:də/ {Rade}<忠告(与格)>; ロシア語 /'gotə/ {góta / róta}<ゴート人の>—/got/ {got / ror}<ゴート人>, {god / roɔ}<年>—/'godə/ {góda / róda}<年の>; 日本語 /suki/ 「好き」—/syacyoo-zuki/ 「社長好き(しゃちょうずき)」, 「社長付き(しゃちょう

うづき)」—/cuki/「付き」. 英語の過去形と過去分詞形 /steɪd/ {stayed} <滞在した>, /bɛgd/ {begged} <請うた>, /geɪzd/ {gazed} <凝視した>—/ɪm'bedɪd/ {embedded} <埋めた>, /'stɑ:tɪd/ {started} <動き出した>—/laɪkt/ {liked} <好んだ>, /dɑ:nst/ {danced} <踊った>; 3人称単数現在形 /steɪz/ {stays} <滞在する>, /bɛgz/ {begs} <請う>, /ɪm'bedz/ {embeds} <埋める>—/'dɑ:nsɪz/ {dances} <踊った>/'geɪzɪz/ {gazes} <凝視する>—/laɪks/ {likes} <好む>, /stɑ:ts/ {starts} <動き出す>; 名詞複数形 /bɔɪz/ {boys} <少年>, /dɔgz/ {dogs} <犬>, /hændz/ {hands} <手>—/desks/ {desks} <机>, /kæts/ {cats} <猫>—/'bʌsɪz/ {buses} <バス>, /'rouzɪz/ {roses} <バラ>の表記は不完全ながらも形態音素論的なものと言える。

朝鮮語の正書法では強い位置との交替を持たない弱い位置だけの音声 [ɿ] は {ɿ} と書かれる。かくしていかなる母音で始まる助詞をも取らない副詞の末尾子音 [ɿ] は {ɿ} と書かれるだけでなく (/간/ {갓} <たった今>; /몬/ {못} <(不可能)>: /몬뿐다/ (/모뿐다/) {못 본다} <見られない>, /모돈다/ {못 온다} <来られない>, /몬닝는다/ {못 읽는다} <読めない>), 母音で始まる助詞を取る外来語名詞の末尾子音 [ɿ] が {ɿ} と書かれるのは、それが実際に /ɿ/ との交替形を持つからである (/포켄/ {포켓} <ポケット>—/포케슨/ {포켓-은} <ポケットは>). 上記の /마지/ {만-이} <長子>の表記は例外と言うべきか? ついでながらソウルの話し言葉では末尾子音 [ɿ] を持つ多くの名詞が事実上 /ɿ/ と交替形を持つに至っている (/나슨/ {낫-은} <鎌は>, {낫-은} <昼は>—/날/ {낫} <鎌>, {낫} <昼>. ただし/나세/ {낫에} <鎌に>, /나제/ {낫에} <昼に>). 韓国の旧正書法では次の場合の終声を書かなかったが、後に修正した./셋/ {셋} <三つ>—/셋-째/ {南旧 세-째} / {南新及び北셋-째} <三つ目>; /넷/ {넷} <四つ>—/넷-째/ {南旧 네-째} / {南新及び北넷-째} <四つ目>.

朝鮮語では中和の位置の濃音を平音字で書くか濃音字で書くかが問題となるはずだが、事実は多く平音字で書かれる。現代語 /낙씨/ {낙시} <釣り>は中期語 “낙이” に由来する単語だが(現代語では平音の後ろには平音の代わりに濃音が来る), 現代語 {낙-다} からの類推で {낙시} と書かれ, /몹씨/ は中期語 /몹씨 mod·bsi/ に由来するものであるが, {몹씨} とは書かれず {몹시} と書かれる。他方動詞 {휘쓸-다} <さらう>は恐らくは中期語 /휘-쓸-다 hui·bsyl·da/ に由来するのだが, {휘쓸-다} でなく {휘쓸-다} と書かれるのは現代語に接頭辞 {휘-} と動詞 {쓸-다} <掃く>があるためだろう。同じような例は {참쌀} <もち米>, {멥쌀} <うるち米>に見られる。中期語 {쌀 bser} / 現代語 {쌀} <米>参照。しかも音素 /ɾ/ は関係ない前の形態素の下に書かれてしまうというように, 形態素の境界を表示する現代朝鮮語の正書法にあって例外をなす。

形態素の境界ということで筆者が思い出すのは, ある韓国人が /아니-다/ {아니-다} を {앙이-다} と書いていたことだが, これなどは {앙-다} との類

推によるものである。類推による正書法の間違ひは非常に多い。次の例などは形態素の境界の表記に関する現行正書法の矛盾と言うべきか？ /집/ {집} <藁> — /집꾼/ (/지꾼/) [/지븐/] {집-은} <藁は> — /지푸라기/ {지푸라기} <藁くず> ; /견/ {견} <横, 脇> — /견-튼/ (/겨튼/) {견-은} <横は, 脇は> — /견-치/ (/겨치/) {견-이} <横が, 脇が> — /겨드랑이/ {겨드랑이} <(体の) 脇> . ただし /값/ {값} <値> — /값꾼/ [/가븐/] {값-은} <値は> — /가버치/ {값-어치} <値打ち> . なお次の場合を参照せよ. /사라지-다/ {사라지-다} <消える> ; /넘어지-다/ {넘어지-다} <倒れる> — /넘-따/ {넘-다} <越える> .

また用言語尾 {습니다}, {소} は常に子音語幹にしか接尾しないのだから, 実際は /-습니다/, /-소/ しかないのだが, そう書かれるのは平音の後ろで平音しか書かないという伝統によるものなのか, それとも中期語以来の表記に従ったのか何の説明もない.

日本語で「ち」「つ」と関連付けられない /zi/, /zu/ は「じ」「ず」と書かれるのが習慣だが(この場合「じ」「ず」は本来の /zi/, /zu/ と「し」「す」と関連する /zi/, /zu/ の2通りあることになる), これも朝鮮語の上のことと似ているだろう. 日本語の現代仮名遣いで /ee/ が「えい」, /oo/ が「おう」と書かれるのは(「ええ」「えー」; 「おお」「おー」ではなく)単なる慣例に過ぎず, たいした根拠はないと言うべきである.

このような語源意識は主として (E) においてさまざまな混乱を招く. /넙적-카-다/ (/넙적카다/) {넙적-하-다} <薄く平べったい> は /넉-따/ {넉-다} <広い> との関連でそう書かれるが, 他方その形容詞と対をなす /납작-카다/ (/납작카다/) は {납작-하-다} と書かれる.

用言語尾 /-습니다/ が {습니다} と書かれるのは別の用言語尾 {습디다} との関連だろうが, 形態素 {습} はもはや現代語には単独では生きているものとは見なしがたい. こうなるとこの表記の原則はもはや形態音素論的の原則というよりは歴史的原則としかいいようがない. 歴史的原則を持つ正書法はいろいろな言語にある. 例: 英語 /sən/ {son} <息子>, {sun} <太陽>; 日本語の歴史的仮名遣い /koozyoo/ (現代)「こうじょう」— (歴史的)「こうじゃう (口上, 厚情, 攻城)」, 「かうじゃう (向上, 恒常, 江上, 交情, 高上)」, 「かうちゃう (工場)」, 「かふじゃう (甲状)」, 「くわうじゃう (荒城)」.

現代朝鮮語の多くの方言では “ㅈ” /e/ と “ㅊ” /ɛ/, “ㅊ” /we/ ~ /ø/, “ㅊ” /we/ と “ㅊ” /we/ とは区別されないから, 事実上これらの表記の違いは歴史的原則によるといえる. 歴史的原則による表記はしばしば誤用をもたらす.

/번-꽃/ (/버꽃/) {벗-꽃} <桜(木)> の /번/ の終声は /ㅍ치/ {ㅍ치} <さくらんぼ> からの類推で {ㅍ} と書かれるようだが, 形態素 /번/ 自体が単独で用いられることはなく, 終声字をそのように決めるいかなる根拠もなく, 北朝鮮の {벗-꽃} の方が妥当と思われる.

形容詞 /올타/ {올-다} <正しい> — /올-바르-다/ {南 올-바르-다} {北

울·바르·다} <正しい>の場合、2 番目の単語で韓国は音素通り書くのに対し、北朝鮮は本来の表記を保とうとする。他方 /실·중·나·다} {싫·중·나·다} <嫌気がさす>では {싫·중} が [실중] とは発音されず /실·중/ であるにも拘わらず、南北朝鮮とも同じ表記である。これは (I) 28 の場合に当たるから、韓国の表記 {울·바르·다} は不当としかいいようがない。

さらに韓国の表記の不統一を挙げれば、(H) 24 に関連して用言語尾 /ㄹ·까/ {南·ㄹ·까} {北·ㄹ·가} <... するだろうか>を挙げることが出来る。/ㄹ·찌/ {南北·ㄹ·지} <... するだろうか>参照。

/이틀/ {이틀} <二日間>—/이튿날/ {이튿·날} <翌日>等 1 から 10 までの日にちを表す名詞においてあたかも 終声 /ㄹ/ と交替するかのよう な /ㄷ/ を設定したかのようだが、歴史的にもそのような形が存在したためしはなく、これは {이튿날} と書くべきだとの意見が何度も出されたにも拘わらず ({ㅅ} は (H) 20 の “사이 시옷” で、{ㄹ} は脱落した)、正書法の改訂の度に見送られてきた。これなどは偽りの原則とでも呼ぶべきか？ 歴史的にも根拠のない表記はいろいろな言語で見られる。英語 /ghost/ {ghost} <幽霊> の {h} は恐ろしさ以外の何ものも表さない。日本語の歴史的仮名遣いには「ませう」、「でせう」(それぞれ現代の「-ましょう」、「-でしょう」に対応)のように根拠のほとんどないものが含まれる。現代仮名遣いで /cuzuku/ <続く>、/cizimu/ <縮む>を「つづく」、「ちぢむ」と表記するのは正書法論上なんらの意味もなさないというべきである。また「えい」/「ええ」、「おう」/「おお」の書き分けもまた正書法論上なんの意味もなく、おろかしいことである。

{무늬} <模様>はソウルでは /무니/ であり (ソウルでは現在 /니/ と /니/ は区別されない)、{회다} <白い>は /히다/ であり、漢字音の {회} (「禧」、「熙」、「喜」、「希」、「稀」、「姫」など) も /히/ であるが、なぜ正書法でそう認められているのか？ {떠우다} /떠우다/ <浮かべる>、{씩우다} /씩우다/ <かぶせる>は {뜨다} <浮く>、{쓰다} <かぶる>との類推でそう書かれるようだが、{키우다} <育てる>—{크다} <大きい>を見ればそれもといたした意味はなさそうである。{지다} <負う>—{저} /저/ <負って>、{치다} <打つ>—{쳐} /쳐/ <打って>の場合は {마시다} <飲む>—{마셔} <飲んで>の例に倣って形態音素論的に意味があると言うべきだろう (以下の [付記] を参照)。

正書法の一部をなす分かち書きや句読法はヨーロッパ語とは異なる構造を持つ日本語、朝鮮語などのアルタイ諸語に適したものはいまだに確立しておらず、問題だらけであり、難しい規定通りに書ける人は皆無である。例えば가·요 {가·요} は (1) 叙述形 <行きます>、(2) 疑問形 <行きますか>、(3) 命令形 <行きなさい>、(4) 勧誘形 <行きましょう>の同音異義形と思われるが、これに対応する句読点は (1) には {}, (2) には {?} が充当されるが、(3) と (4) には何を当てるべきか？ 何を句読点と認めるべきかか

らしてきちんと論じられていない。北朝鮮は分かち書きや句読法を編集者レベルでは一応規定通りに厳密に行っているようだが、庶民レベルでは決してそういうことはなく、韓国に至ってはこの問題にきちんとした関心を持つ出版社の編集者やジャーナリスト、学者らの水準は極めて低いといわざるを得ない。もっともこの点については日本も韓国並みの水準にとどまっている。

正書法について今まで述べたことをまとめると、ほぼ次のようになる。*は単語と単語の間でも生ずるもの。

任意的な交替 (A) (①*, ②*, ③*, ④*)

形態音素論的原則 (13)

全体的な交替

形態音素論的交替 (C) (⑥*, ⑦*, ⑧, ⑨*, ⑩), (D) (⑪), (E) (⑫)

[特殊なもの (I) (25, 26, 27, 28)]

擬似的な形態音素論的交替 (F) (13, 14)

部分的な交替

漢字語 (B) (⑤, 15, 16, 17, 18, 19), (H) (21*)

合成語 (H) (20*, 22, 23, 24*)

歴史的原則 (13)

偽りの原則 (13)

正書法を学問的に扱う分科を正書法論という。正書法論は音素、形態音素などと密接な関係を持つ。日本も南北朝鮮も真の意味での正書法論がいない。各国の正書法を比較研究する対照正書法論の確立が必要である。朝鮮語の正書法が論理的に比較的よく整備されたドイツ語やロシア語の正書法の正確さに近づくためにはなお一層の努力を要する。

[付記]

朝鮮語の半切表を見るに、スとㄷの系列において発音は자=자, 저=저, 조=조, 주=주; 차=차, 처=처, 초=초, 추=추であるし、また /ㅈ/ と /ㅊ/, /ㅊ/, /ㅌ/, /ㅍ/ が結合することはない。저と처は用言の第3語基形に表れるだけであり(지다<負う>, 치다<打つ>), 形態音素論的な考慮によるものである(마시다<飲む>, 마셔<飲んで>参照)。韓国の最新の正書法で今まで多く外来語に用いられてきた {자}, {저}, {조}, {주}; {차}, {처}, {초}, {추}という表記を止めたのは賢明である。他方半切表に現れる다, ㅌ, ㅍ; ㅌ, ㅍ, は現代朝鮮語の表記にはまったく現れず、また /ㅈ/ と /ㅊ/, /ㅊ/, /ㅌ/, /ㅍ/ が結合することはない。더と터はやはり用言の第3語基形に表れるだけである(디디다<踏む>—디더<踏んで>, 버티다<持ちこたえる>—버터<持ちこたえて>)。半切表にある다, ㅌ, ㅍ; ㅌ, ㅍ, ㅍにしても朝

鮮人の発音を聞く時は /디아/, /디요/, /디유/; /티야/, /티요/, /티유/ のように
 実際は2音節であるかのようなのである. このようなことを総合すると現代朝鮮
 語の半切表の一部は次のように再編成し得るかも知れない.

/다/ {다} /다/ {자} /더/ {더} /더/ {저} /도/ {도} /도/ {조}
 /두/ {두} /두/ {주} /드/ {드} /디/ {지} /딕/ {디}
 /타/ {타} /타/ {차} /터/ {터} /터/ {처} /토/ {토} /토/ {초}
 /투/ {투} /투/ {추} /트/ {트} /티/ {치} /딕/ {티}
 /따/ {따} /따/ {짜} /떠/ {떠} /떠/ {찌} /또/ {또} /또/ {조}
 /뚜/ {뚜} /뚜/ {쭈} /뜨/ {뜨} /띠/ {찌} /딕/ {띠}

こうなると音素 /ㅈ/, /ㅊ/, /ㅉ/ がなくなってしまうことになる. しかし平
 安道方言では/자/ [ʦa] / [ɬa] /za/, /자/ [ʃa] / [ɬa] /zya/; /차/ [ʦʰa] /ca/, /차/
 [ʃʰa] /cya/ のようになる.

ただこうすると {더}, {터} をどのように音論的に処理するべきかが問題と
 なってしまう.

[記] これは2005年11月東北大学で行った講義に加筆修正を施したもの
 である. 柳田賢二氏(東北大学助教授)と斎藤純男氏(東京学芸大
 学教授)から大変貴重なご意見をいただいた. 両氏に心からの謝意
 を表す.